伊勢国分寺跡 5

2005 年 3 月

鈴鹿市考古博物館

例　言

1．本書は，国・県費補助事業として鈴鹿市が 2004(平成 16) 年度に実施した史跡伊勢国分寺跡記念物保存修理事業にかかる伊勢国分寺跡（第 30 次）発掘調査の概要をまとめたものである 。

2．発掘調査は下記の体制で実施した 。

調査主体　鈴鹿市（市長　川岸　光男）

調査指導　八賀　晋（三重大学名誉教授）
大場範久（鈴鹿市文化財調査会会長）
川越俊一（奈良文化財研究所平城宮跡発掘調査部考古第二調査室室長）
金田章裕（京都大学理事・副学長）
高瀬要一（奈良文化財研究所文化遺産研究部遺跡研究室室長）
渡辺　寛（皇學館大学文学部国史学科教授）
和田勝彦（四日市市立博物館館長）
文化庁文化財部記念物課
三重県教育委員会文化財保護室

調査担当　鈴鹿市考古博物館

（組織及び構成）
参事兼鈴鹿市考古博物館長　平井茂公
副参事兼埋蔵文化財グループリーダー　中森成行
埋蔵文化財グループ主幹　宮崎正光・北条正則
副主査　田中忠明・水橋公恵
事務吏員　伊藤　淳
嘱託　吉田真由美・林　和範
臨時職員（整理室）坂下日向・杉本恭子・徳永由起子・永戸久美子
別府智子

3．調査を実施した個所及び面積は以下のとおりである 。
三重県鈴鹿市国分町字堂跡 297 外　合計 1,100 ㎡

4．調査期間は平成 16 年 7 月 23 日～平成 17 年 3 月 25 日である。

5．現地作業と本書の執筆・編集は伊藤が担当した。

6．現地調査参加者は以下のとおりである 。
勝野春男・川喜多日支子・田中重治・永戸尚子・永戸久子・永戸ヒナ子・永戸三代・永戸宗武・林紘・牧村正巳・吉岡健次

7．遺跡位置図には国土地理院発行の 1/25,000 地形図鈴鹿・亀山の一部を使用した。

8．座標は過去の調査成果と整合性を保つため国土座標第Ⅵ系を用いた。図中の方位は座標北を示す 。

9．遺構番号は遺構の種別を示すＳＡ (塀)・ＳＢ（建物）・ＳＣ（通路）・ＳＤ（溝）・ＳＫ（土坑）・ＳＩ（竪穴住居）の記号の跡に発掘年次を示す「04」と３桁の通し番号を付け SD04001 のように示した 。

10．調査区は，各調査区の通称のほかに，12 mの方眼をベースとして北東角の国土座標のＹ・Ｘそれぞれの下三桁を組み合わせた 180・786 といった表示を併用している。

11．本調査にかかる遺物・写真・図面はすべて鈴鹿市考古博物館が保管している。

12．調査及び報告書刊行に際して上記指導委員の先生方の他，地元各位はじめ下記の方々のご協力を得た 。（敬称略・順不同）
鈴木克彦・竹内英昭・野原宏司・山下信一郎・山田猛・吉水康夫

目　次

本文目次

Ⅰ．はじめに
（1）調査の経緯と経過　1
（2）周辺の環境　2
Ⅱ．調査の成果
1．築地南調査区・南東院南門推定地調査区
（1）基本層序　6
（2）検出遺構　6
（3）出土遺物　6
2．塔推定地調査区
（1）基本層序　13
（2）検出遺構　13
3．東門推定地調査区
（1）基本層序　14
（2）検出遺構　14
4．築地北調査区
（1）基本層序　14
（2）検出遺構　14・17
5．僧坊調査区
（1）基本層序　19
（2）検出遺構　19
（3）出土遺物　19
Ⅲ．まとめ　24・25
報告書抄録　29

図版目次

Fig. 1　伊勢国分寺跡の位置と周辺の遺跡　2
Fig. 2　調査区位置図　3・4
Fig. 3　築地南調査区遺構配置図　7
Fig. 4　南東院南門推定地調査区遺構配置図　7
Fig. 5　築地南調査区セクション図　8
Fig. 6　南東院南門推定地調査区セクション図　8
Fig. 7　南門推定地出土軒丸瓦（1）　9
Fig. 8　南門推定地出土軒丸瓦（2）・軒平瓦（1）　10
Fig. 9　南門推定地出土軒平瓦（2）　11
Fig.10　南門推定地出土軒平瓦（3）　12
Fig.11　築地南出土軒平瓦・刻印平瓦　12
Fig.12　塔推定地調査区遺構配置図　13
Fig.13　東門推定地調査区遺構配置図　15
Fig.14　東門推定地調査区セクション図　16
Fig.15　築地北調査区遺構配置図　17
Fig.16　築地北調査区セクション図　18
Fig.17　僧坊調査区遺構配置図　20
Fig.18　僧坊推定復元図　21
Fig.19　僧坊調査区セクション図　22
Fig.20　僧坊出土瓦・塼・土器　23

表目次

Tab. 1　伊勢国分寺跡発掘調査履歴　5

写真目次

Plate 1　築地南調査区・南東院南門推定地調査区・塔推定地調査区全景／南門推定地調査区全景／東門推定地調査区全景／築地北調査区全景／僧坊調査区全景／ SD04001・SD04003 サブトレンチ／ SD04001・SK04015 サブトレンチ／ SD04013・SK04015 サブトレンチ　26
Plate 2　SD04010・SD04013 サブトレンチ／ SD04010 瓦堆積状況／軒丸瓦 1 出土状況／軒丸瓦 2・軒平瓦 10 出土状況／ SK04023 ／ SX04024 ／ SI04026 ／ SD04028 サブトレンチ　27
Plate 3　SD04036 サブトレンチ／ SD04061・SD04068 サブトレンチ／ SD04066 サブトレンチ／ SD04059 サブトレンチ SD04084 サブトレンチ／ブトレンチ拡張／講堂北土手サブトレンチ　28
Plate 4　南門推定地調査区出土軒丸瓦・軒平瓦　29
Plate 5　南門推定地調査区出土軒平瓦／築地南調査区出土刻印平瓦／僧坊調査区出土軒丸瓦・刻印丸瓦・塼・土器　30

Ⅰ．はじめに

１．調査に至る経緯と経過

伊勢国分寺跡は鈴鹿川左岸の台地上，鈴鹿市国分町字堂跡・西高木・西谷に所在する。大正 11（1922）年 10 月 12 日に国史跡に指定されている。

昭和 63 年（1988）度から平成 2（1991）年度にかけ，鈴鹿市教育委員会によって史跡の範囲確調査が実施された。その結果，伽藍地は築地塀に囲まれ，ほぼ 180 m四方の規模であることが確認された。鈴鹿市ではその成果をもとに，平成 7（1995）年度から 3 ヵ年で史跡公有地化を完了した。また，ガイダンス施設を兼ねた鈴鹿市考古博物館を隣接地に建設し，平成 10（1998）年 10 月に開館した。

平成 11（1999）年度から新たに，史跡整備計画策定に必要な中心伽藍の位置・規模の確定を目的とした史跡指定地内の調査に着手した。平成 11・12 年度は市の単費事業として，平成 13（2001）年度からは国・県費補助を受け「史跡伊勢国分寺記念物保存修理事業」として実施している。

平成 11 年度の第 22・23 次調査は，推定講堂跡を対象として実施した。講堂基壇を検出し，東西規模が約 33 mであることを確認した。

平成 12（2000）年度の第 24 次調査では，講堂基壇の南北規模約 21 mを確認し，基壇化粧の基底と見られる塼・瓦の列と軒先から落下した状態の軒瓦を検出した。金堂の調査も平行して実施し，基壇は講堂基壇から南に 22 m離れて確認され，東西約 31 m×南北約 22 mの規模であることが確認された。

平成 13 年度の第 25 次調査では，中門・回廊の確認が行われた。金堂基壇から南に約 31 m離れて，中門基壇を確認した。基壇は削平され基礎地形の最下部がかろうじて残存するのみであった。規模は東西 19.5 m×南北 12 mを測る。回廊は外周溝によって規模が確認され，東西 68 m×南北 51 m，幅 7 mで中門と金堂を結び金堂院を形成する。

平成 14（2002）年度の第 28 次調査では南北 11.2 m×東西 17.6 mの規模の南門基壇を確認した。さらに塔跡を探す過程で，伽藍地の東 1/3 が南北方向の築地塀によって区画され，その内部がさらに東西の築地塀によって分けられ北東と南東の 2 つの院を成していることが判明した。南東院の隅からは大型掘立柱建物が検出された。

平成 15（2003）年度の第 29 次調査では，僧坊を確認した。規模は南北 9 m×東西 72 mと思われるが，残存状況が極めて悪いため明らかではない。また，北東院の中心から大型の掘立柱建物が検出され，出土した土器から食堂的な性格を持つ建物ではないかと考えられる。さらに第 28 次調査で見つかった大型掘立柱建物の北側から，東西の柱筋をそろえた掘立柱建物が検出された。

本年度の第30次調査は未確認の塔を検出することと，第 29 次調査で確認された僧坊の規模の確認，伽藍地の東 3 分の 1 を区画する南北方向の築地とその南東の院の南門，北東の院の東門をそれぞれ確認するため調査区を設定し調査を行った。また，必要に応じて調査区を拡張した。

調査は，7 月 23 日の築地南調査区の表土除去から着手した。作業員は 8 月 6 日から投入した。11 月 8 日には伊勢国府跡・伊勢国分寺跡調査指導委員会を開催した。遺構検出がすべて完了した平成 17 年 1 月 26 日には僧坊調査区など全調査区の航空写真撮影を行った。その後記録作業等の補足的な作業を 2 月 28 日まで続けた。3 月 5 日には現地説明会を開催して，約 46 名の市民の参加を得た。その後記録作業等の補足的な作業を 2 月 28 日まで続けた。山砂による遺構面の保護と埋め戻しを行いすべてが完了したのは 3 月 25 日であった。

２．周辺の環境

伊勢国分寺跡 (1) の周辺には関連する律令期の遺跡が多数立地している。国分寺跡の南東 0.5 ｋｍに立地する南浦遺跡 (5) はかっては伊勢国分尼寺跡とされていたが，平成２年度からの調査で国分寺に先行する白鳳寺院の可能性が高いとされ大鹿（おおか）（南浦）廃寺と命名された。今のところ確実な伽藍遺構は確認されていない。また，同遺跡からは平成 10 年の調査により大型の掘立柱建物が重複して検出され，豪族居宅や官衙と複合している可能性が考えられる。大鹿（南浦）廃寺に瓦を供給したのは，浪瀬川の谷を挟んで南西 1 km に位置する山辺瓦窯跡 (7) であることが確認されている。

国分寺跡の南側に隣接する狐塚遺跡 (4) では，平成６年度の考古博物館建設のための発掘調査により，台地の先端部を区画する柵列と区画内に整然と配列された倉庫群が検出され，河曲郡衙の正倉院と考えられている。谷を挟んだ東側でも掘立柱建物群が検出され，郡衙政庁等の一部と見られている。

国分寺跡から東に 0.5km の現国分町の集落下には国分遺跡 (2) が立地する。出土する瓦等から伊勢国分尼寺跡の有力候補とされているが，伽藍遺構は未確認である。同遺跡から出土する瓦と同笵の瓦は，西約 4 km に位置する川原井瓦窯跡 (12) で生産されていたことが確認されている。

国分寺と最も関連の深い伊勢国の国府跡は，国分寺跡から西に 7 km に位置する長者屋敷遺跡 (14) であることが確認されている。平成 4 年度からの調査により政庁遺構や大形瓦葺礎石建物群が検出され奈良時代後半の伊勢国府跡であることが明らかになった。平成 14 年３月 19 日には主要な３地点約 70,000 ㎡が国史跡に指定された。ただしこの国府は奈良時代末から平安時代初頭には廃絶したとみられ，鈴鹿川の対岸に地名として残る国府町に移転したと考えられている。国府町では，三宅神社遺跡 (17) など奈良時代後半から平安時代にかけての大規模な遺跡が確認されつつあるが後期国府の実態はまだ明らかになっていない。

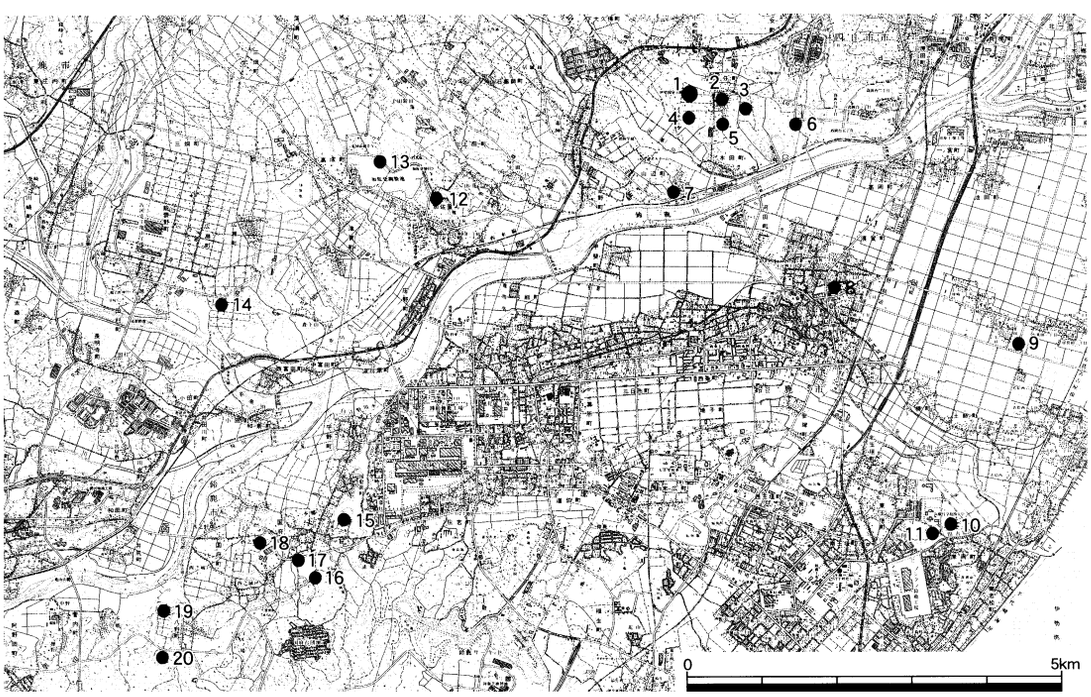


Fig.1　**伊勢国分寺跡の位置と周辺の遺跡** (1:100,000)

１．伊勢国分寺跡　２．国分遺跡（国分尼寺推定地）　３．国分東遺跡　４．狐塚遺跡（河曲郡衙跡）　５．南浦遺跡（大鹿廃寺）　６．寺山遺跡　７．山辺瓦窯跡　８．須賀遺跡　９．上箕田遺跡　10．天王遺跡　11．天王屋敷遺跡（廃寺）　12．川原井瓦窯跡　13．北野古墳　14．長者屋敷遺跡（伊勢国府跡）　15．梅田遺跡　16．天王山西遺跡　17．三宅神社遺跡　18．国府Ａ遺跡　19．八野遺跡　20．八野瓦窯跡

次数	調査年度	遺跡名	調査期間	面積 (㎡)	調査原因	概要
1 次	1988	伊勢国分寺跡	880920 ～ 881215	450	学術	国分寺築地・掘立・竪穴住居
2 次	1989	伊勢国分寺跡	891002 ～ 891219	470	学術	国分寺築地
3 次	1990	伊勢国分寺跡	901011 ～ 901223	352	学術	竪穴・掘立柱建物・国分寺南門・築地
		南浦遺跡		150		掘立柱建物
4 次	1991	伊勢国分寺跡	911002 ～ 911225	80	学術	土坑
		南浦遺跡		545		瓦溜・掘立柱建物
5 次	1992	南浦遺跡	920907 ～ 921105	200	学術	大鹿山６号墳・瓦溜
		国分南遺跡		80		溝
6 次	1993	国分西遺跡	930913 ～ 931124	338	学術	瓦溜・鬼瓦
		国分遺跡		19		ピット
		伊勢国分寺跡		142		溝
7 次	1994	伊勢国分寺跡	940523 ～ 940731	3,500	博物館	大型掘立柱建物
			941201 ～ 950131			掘立柱建物・古墳周溝
8 次	1994	国分遺跡	940801 ～ 941030	300	学術	尼寺北限溝・鬼瓦・瓦塔
		国分西遺跡		8		なし
9 次	1994	伊勢国分寺跡	950105 ～ 950228	1,200	博物館	掘立柱建物（倉庫）・掘立柱塀
10 次	1995	狐塚遺跡	950803 ～ 951016	880	学術	掘立柱建物（河曲郡衙正倉）・竪穴住居
						古墳周溝
11 次	1995	伊勢国分寺跡	950510 ～ 950728	1,200	博物館	溝・土坑・掘立柱建物
12 次	1995	狐塚遺跡・	950626 ～ 960111	2,170	博物館	掘立柱建物
		伊勢国分寺跡			（進入路）	掘立柱建物・竪穴
13 次	1996	伊勢国分寺跡	960415 ～ 970306	3,100	博物館	掘立柱建物
		狐塚遺跡			（進入路・駐車場）	大型掘立柱建物
14 次	1996	伊勢国分寺跡	960605 ～ 961002	850	博物館	溝・土坑
14-2 次	1996	国分遺跡	970221 ～ 970221	12	寺院	土坑・灰釉陶器
15 次	1996・97	伊勢国分寺跡	970307 ～ 970425	650	博物館	溝・掘立柱柵
16 次	1997	国分南遺跡	970424 ～ 970531	1,140	ビニールハウス	掘立柱建物・鋳造遺構
17 次	1997	南浦遺跡	970617 ～ 970816	830	ビニールハウス	掘立柱建物・鬼瓦
18 次	1997	伊勢国分寺跡	970918 ～ 971204	680	博物館 (外周道路)	掘立柱建物（川曲郡衙正倉）
19 次	1997	伊勢国分寺跡	970929 ～ 980214	3,000	農地造成	掘立柱建物・中世墓・古墳
20 次	1997	狐塚遺跡	980304 ～ 980316	90	土地造成	掘立柱建物
21 次	1998	狐塚遺跡	980805 ～ 980809	1,129	農地造成	竪穴・掘立
22 次	1999	伊勢国分寺跡	990715 ～ 990930	153	学術（市単）	国分寺講堂
23 次	1999	伊勢国分寺跡	000204 ～ 000331	132	学術（市単）	国分寺講堂
24 次	2000	伊勢国分寺跡	000508 ～ 000919	216	学術（市単）	国分寺講堂・金堂
25 次	2001	伊勢国分寺跡	010514 ～ 011031	1,100	学術（国補）	国分寺中門・回廊
			020207 ～ 020312			国分寺南門・竪穴・掘立柱建物
26 次	2001	国分西遺跡	010703 ～ 010704	16	個人住宅	土坑・溝
27 次	2001	国分西遺跡	020115 ～ 020131	98	個人住宅	土坑・掘立柱建物・溝・鋳造関係遺構
28 次	2002	伊勢国分寺跡	020509 ～ 030228	1,891	学術 (国補)	国分寺南門・築地・大型掘立柱建物・竪穴住居
29 次	2003	伊勢国分寺跡	030804 ～ 040312	2,374	学術 (国補)	国分寺僧坊・北門・大型掘立柱建物・築地
30 次	2004	伊勢国分寺跡	040723 ～ 050128	1,100	学術 (国補)	国分寺僧坊・築地
合計				30,645 ㎡		

Tab.1　**伊勢国分寺跡発掘調査履歴**

Ⅱ. 調査の成果

1. 築地南調査区・南東院南門推定地調査区

第 28 次調査で伽藍の東側３分の１を区画する南北の築地塀の存在が確認されたが，同調査で行われたトレンチ調査では南に伸びる築地塀は確認されなかった。そのため今年度の調査では南東院の存在とその規模を明らかにするため，南辺築地と伽藍を区画する南北の築地の接点を確認するための調査区『築地南調査区』を設定した。

また，南北の築地塀が存在し南東院を形成した場合に作られた可能性が高いと思われる南門の存在を確認するため，東辺築地から西に 30m の地点すなわち伽藍地の東３分の１の区画の中ほどにあたる地点で南門の存在を確認するための調査区『南東院南門推定地調査区』を設定し調査を行った。

(1) 基本層序

地表は黄褐色土の耕作土がある。築地南調査区ではその下層には褐色土の旧耕作土が見られる。この耕作土を取り除くと明黄褐色・明赤褐色の地山となり，この層の上面で遺構の検出を行った。築地南調査区・南東院南門推定地調査区では東西で検出面の高低差が 0.6 mほどあり西に行くほど低くなる状態である。

(2) 検出遺構 (Fig. ３・４)

築地南辺 SA04004

道路下にあるため全体は確認できないが，北辺のみが確認された。外溝が検出されていないため基底部幅の規模は不明である。

築地南辺内溝 SD04001

築地南調査区では調査区の全体で溝の南肩は確認できるものの，北肩は中世以降に掘削された溝 SD04003 と SD04002 によって撹乱を受けている。

南東院南門推定地調査区でも遺構が重複し，溝の南肩は残っているものの，北肩は一部確認できるのみである。

規模は幅約 2.3 m，検出面からの深さは 0.3 ～ 0.6 m を測る。

溝 SD04013

南東院南門推定地調査区で検出した溝で，調査区の東隅では内溝 SD04001 と重複し，調査区中ほどから北へ蛇行し内溝 SD04001 と約 1 m離れる。調査区の北では，土坑 SK04015 に北肩を切られる。西へ行くほど浅くなる。幅は 1.5 m，検出面からの深さは約 0.2 ～ 0.3 mを測る。築地南調査区では検出されなかった。

溝 SD04010

南東院南門推定地調査区で検出した溝で，SD04001・SD04013 の上面で検出した溝である。全体に浅くほとんどを大ぶりの瓦が占め，数点の軒瓦が出土した。

溝 SD04014

南東院南門推定地調査区で検出した溝で，調査区を横断する東西方向の溝である。土坑 SK04015 に切られる。上層に瓦片を多く含み全体にしまりがない。幅約 1 m，深さ約 0.5 mを測る。

(3) 出土遺物

出土遺物は土嚢袋で 100 袋以上が出土している。大半が丸瓦・平瓦の破片である。土器類は，須恵器片や土師器片，山茶碗片があるが，細片で，明確な遺構からの出土ではないため図化はしていない。

南門推定地調査区（Fig.7 ～ 10）

軒丸瓦

全て SD04010 から出土した。(3) は上面出土。その他はサブトレンチの掘削で出土。

全て単弁八葉蓮華文軒丸瓦でⅡＡ０２形式である。中房に１＋５個の蓮子，外区に 16 個の珠文がある。全体に焼成が悪く，特に上面出土のものは風化が著しい。（註１）

軒平瓦

(6 ～ 10) はSD04010から出土した。(6･7) は上面出土。その他はサブトレンチの掘削で出土。(11) は SK04015 の上面出土。(12) は表土除去作業で出土。

全て均整唐草文ⅡＢ０２形式である。唐草が３と３分の１単位で，外区に 34 個の珠文がある。軒丸瓦と同様に焼成が悪い。

築地南調査区（Fig.11）

軒平瓦

(13) は SD04003 の上面出土。表面が割れており２個の珠文以外確認できないため形式は不明である。

刻印平瓦

（14）は SD04003 の上面出土。凹面に刻印される。刻印は「勾」でⅡＡ０３形式である。（註２）

（註１）ここで用いた伊勢国分寺系の軒丸瓦と軒平瓦の分類は新田剛 2002『伊勢国分寺跡１』鈴鹿市教育委員会に基づく。

（註２）ここで用いた刻印瓦の分類は新田剛 2004『文字瓦を考える』鈴鹿市教育委員会に基づく。

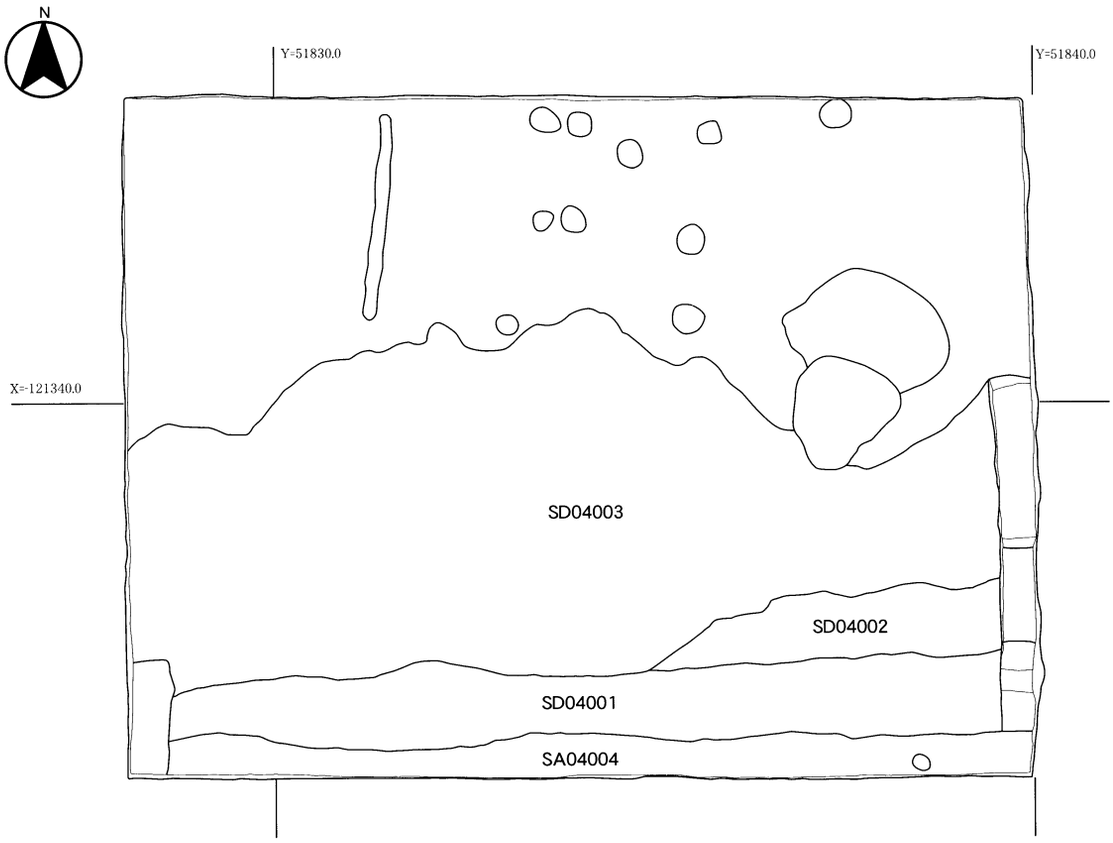


Fig.3　**築地南調査区遺構配置図（1:100）**

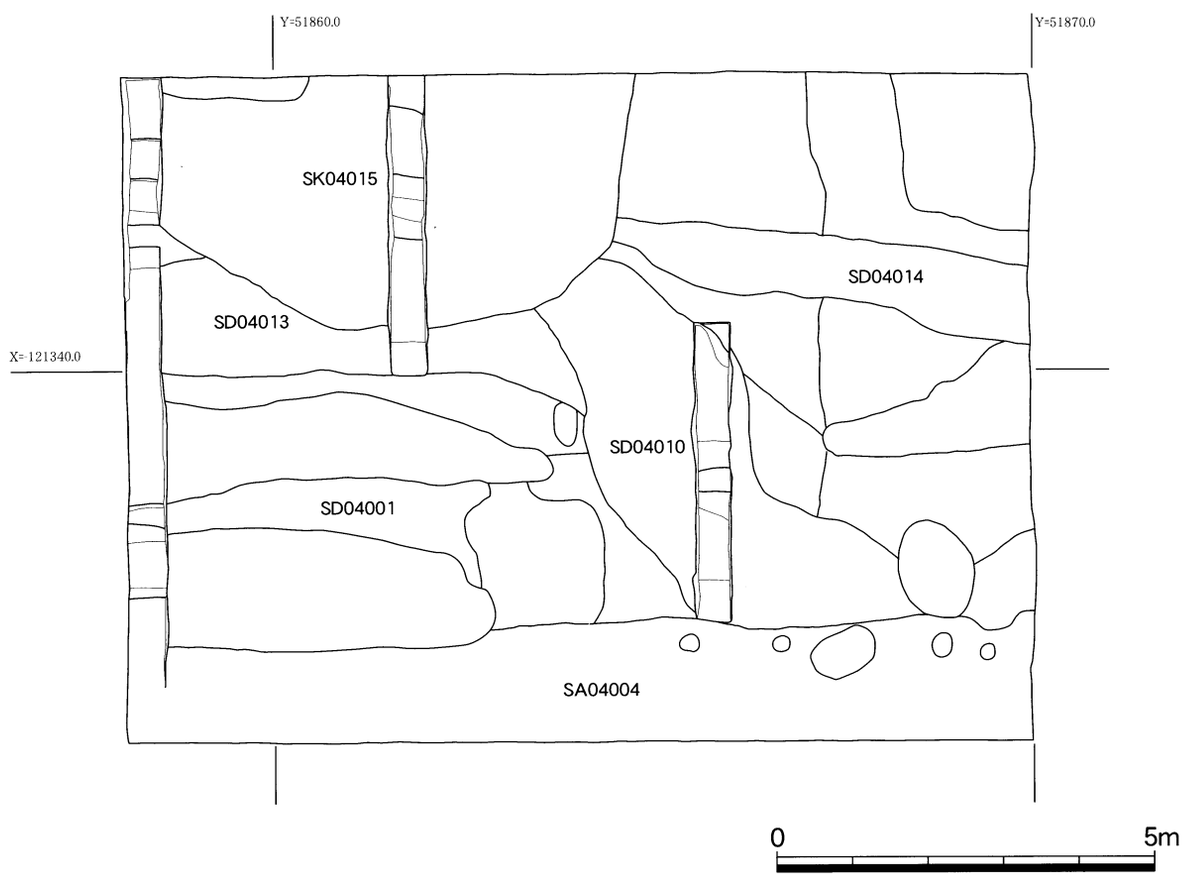
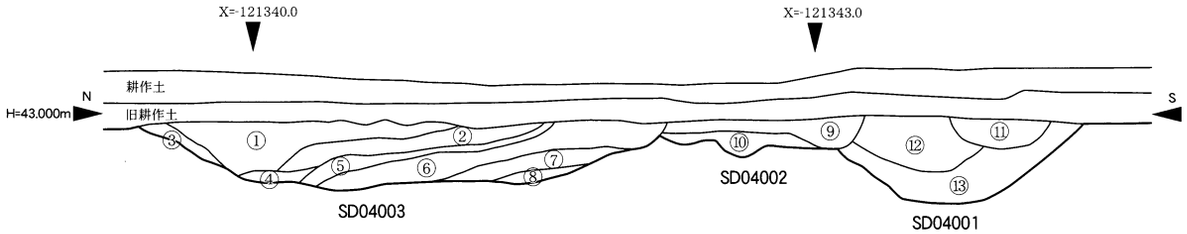


Fig.4　**南東院南門推定地調査区遺構配置図（1:100）**

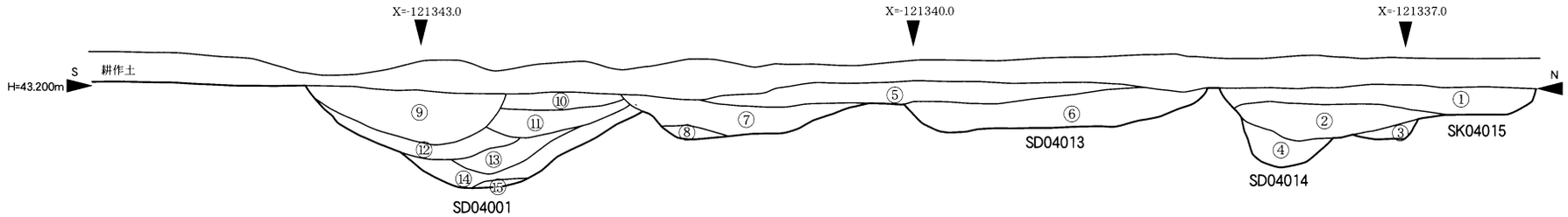
Y=51840ラインサブトレンチ



① 7.5YR4/4　褐色土　7.5YR4/6褐色土が混じる
② 7.5YR4/4　褐色土
③ 7.5YR4/4　褐色土
④ 7.5YR5/6　明褐色土　瓦片を少量含む
⑤ 7.5YR5/8　明褐色土　しまりなく瓦片を少量含む
⑥ 7.5YR4/4　褐色土　しまりなく全体に瓦片を含む
⑦ 10YR4/6　褐色土
⑧ 10YR5/6　黄褐色土
⑨ 7.5YR4/6　褐色土
⑩ 7.5YR3/4　暗褐色土
⑪ 7.5YR4/6　褐色土　全体に瓦片を含む
⑫ 7.5YR5/6　明褐色土　瓦片を少量含む
⑬ 7.5YR4/6　褐色土　やや赤がかる
地山　7.5YR5/8　明褐色土

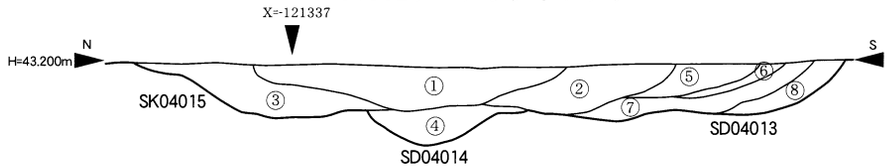
Fig.5　**築地南調査区セクション図（1:40）**

Y=51858ラインサブトレンチ



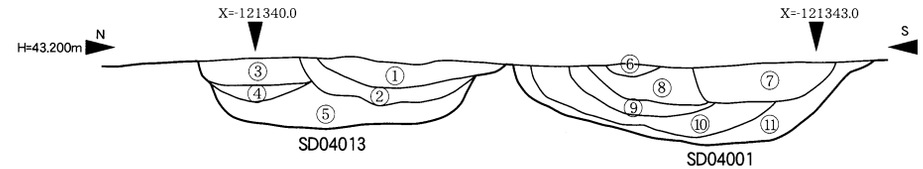
① 7.5YR4/4　褐色土　瓦片を含む
② 7.5YR4/6　褐色土　全体に瓦片を含む
③ 10YR5/6　黄褐色土
④ 10YR4/6　褐色土　しまりがない
⑤ 7.5YR4/6　褐色土　大ぶりな瓦を少量含む
⑥ 7.5YR4/6　褐色土　瓦片を含む
⑦ 7.5YR4/6　褐色土 瓦片を少量含む
⑧ 7.5YR5/8　明褐色土
⑨ 7.5YR4/6　褐色土　上層で瓦片を含む
⑩ 7.5YR5/8　明褐色土
⑪ 7.5YR4/6　褐色土
⑫ 7.5YR4/6　褐色土　7.5YR5/6明褐色土のかたまりが混じる
⑬ 7.5YR5/6　明褐色土
⑭ 7.5YR4/6　褐色土
⑮ 5YR4/8　赤褐色土
地山　7.5YR5/8　明褐色土　底は5YR4/8　赤褐色土

Y=51862ラインサブトレンチ



① 7.5YR4/6　褐色土　全体に瓦片を含む
② 7.5YR3/4　暗褐色土　まばらに瓦片を含み上層では多く含む
③ 7.5YR3/4　暗褐色土　やや赤がかり瓦片を含む
④ 10YR4/6　褐色土　しまりがない
⑤ 7.5YR4/4　褐色土　7.5YR3/4暗褐色土が混じる
⑥ 7.5YR4/6　褐色土　②より赤がかる
⑦ 7.5YR4/6　褐色土　瓦片を少量含む
⑧ 7.5YR5/6　明褐色土
地山　7.5YR5/8　明褐色土

Y=51866ラインサブトレンチ



① 7.5YR4/6　褐色土　全体が大ぶりな瓦
② 7.5YR4/6と3/4のまだら　褐色土　瓦片を含む
③ 7.5YR6/4　褐色土　全体が大ぶりな瓦
④ 7.5YR4/4　褐色土
⑤ 7.5YR5/6　明褐色土
⑥ 7.5YR4/6　褐色土　瓦片を含む
⑦ 7.5YR3/4　暗褐色土　全体が大ぶりな瓦
⑧ 5YR4/8　赤褐色土
⑨ 7.5YR5/6　明褐色土
⑩ 7.5YR4/6　褐色土
⑪ 7.5YR4/6　褐色土　7.5YR3/4暗褐色土が混じる
地山　7.5YR5/8　明褐色土

Fig.6　**南東院南門推定地調査区セクション図（1:40）**

0　2m

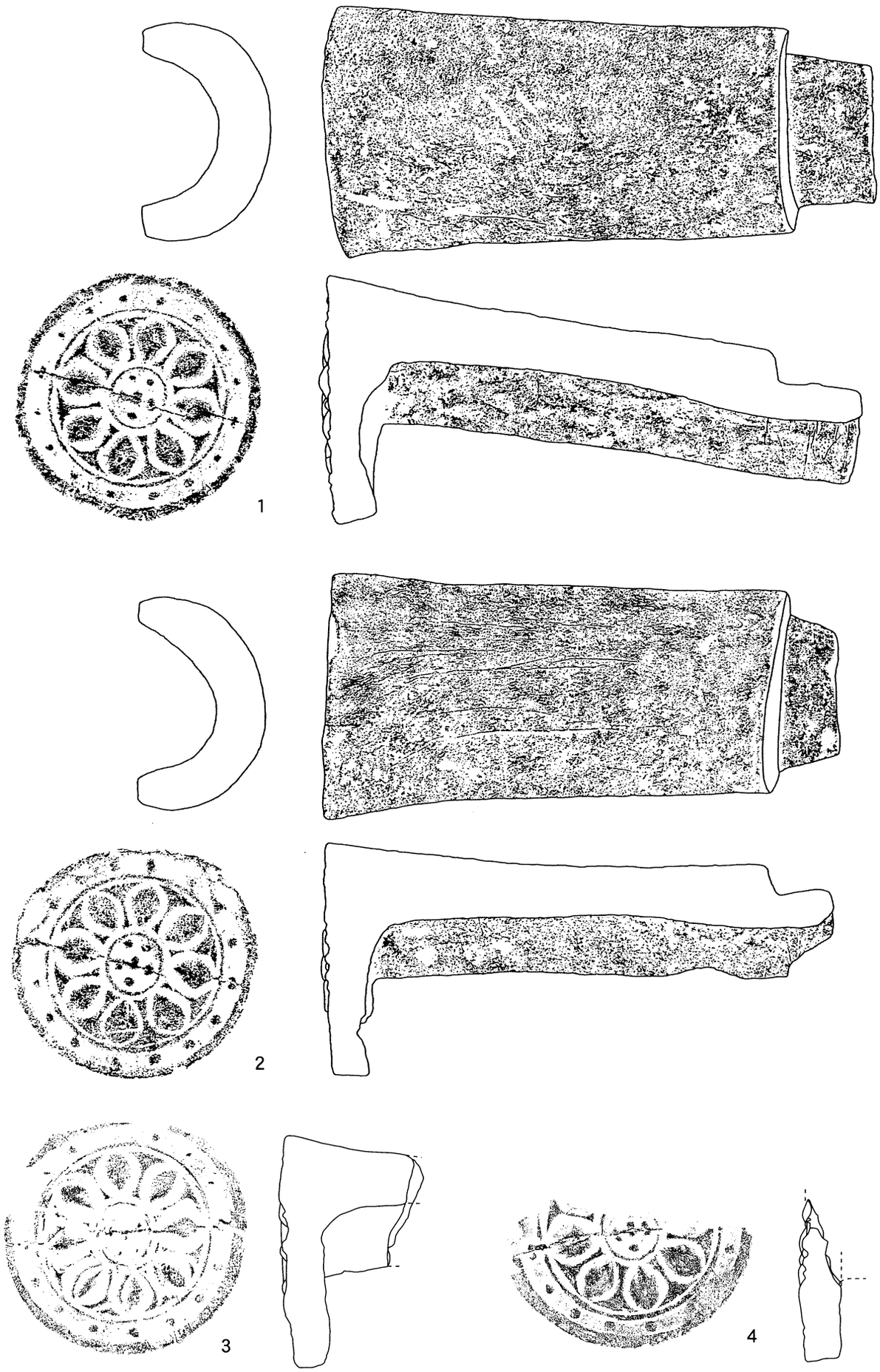


Fig.7　**南門推定地出土軒丸瓦（1）（1：4）**

0　20cm

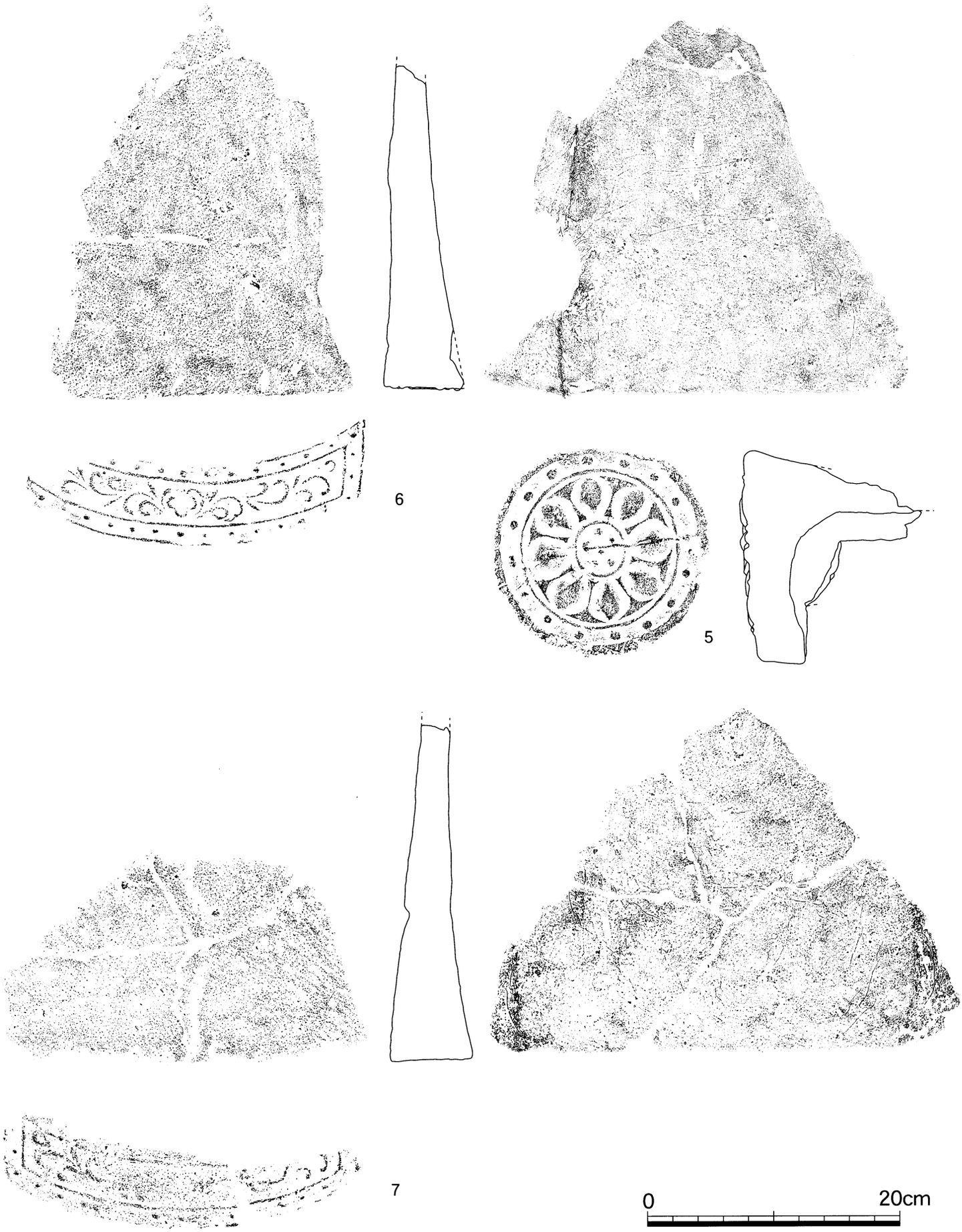


Fig.8　**南門推定地出土軒丸瓦（2）・軒平瓦（1）（1：4）**

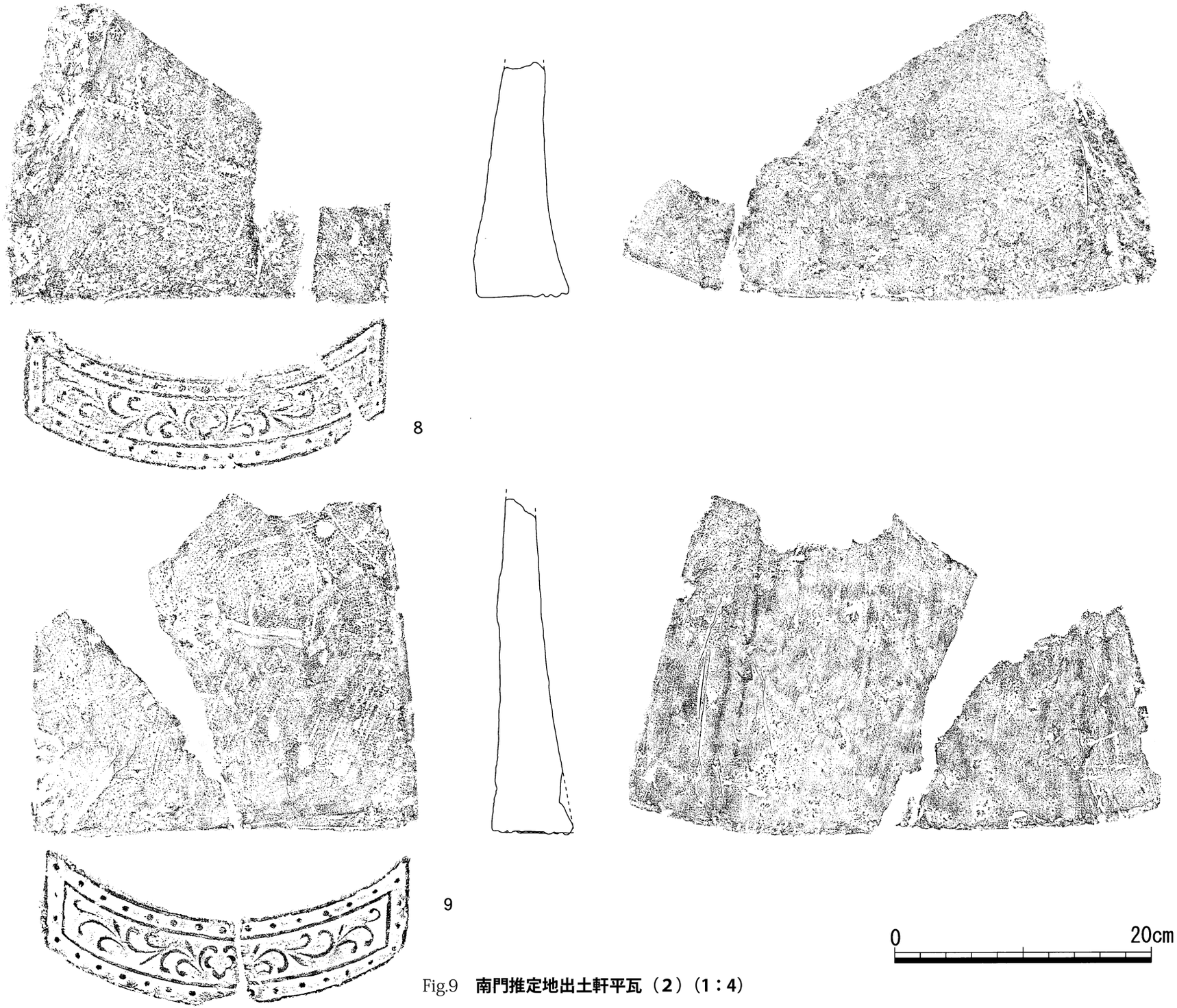


Fig.9　**南門推定地出土軒平瓦（2）（1：4）**

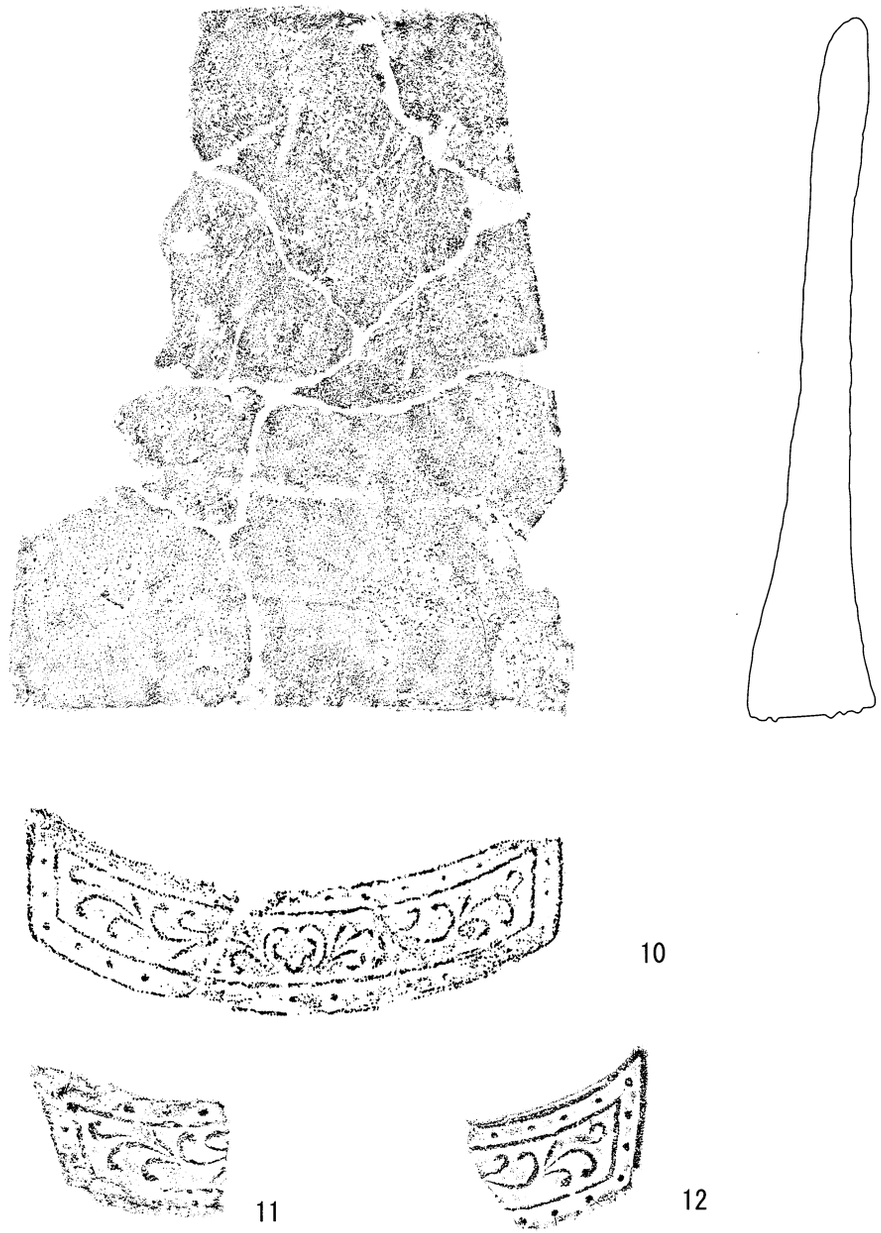


Fig.10　**南門推定地出土軒平瓦（3）（1：4）**

Fig.11　**築地南出土軒平瓦・刻印平瓦　（1：4）**

2. 塔推定地調査区

これまでの調査において，伊勢国分寺跡の主要伽藍は約 180 m四方とされる伽藍地の西３分の２に偏ることが確認されている。そのため，東側３分の１の広い空閑地に塔が建てられていた可能性が高いと推定されてきた。しかし，第 28・29 次調査で伽藍内南東院の南東隅で大型の掘立柱建物が南北２棟確認された。また，北東院では食堂と考えられる大型の掘立柱建物が確認され，伽藍内を築地で区画したそれぞれの院の構成が次第に明らかとなつつあり，伽藍地内で塔を建てることができたのではないかと考えられる空閑地が次第に限定されてきた。

そのため今回の第 30 次調査では，第 28 次調査でトレンチ調査を行った箇所について，面的に広げ塔基壇の確認を行うこととした。調査箇所は，塔の建設が可能であると考えられる空間を考え，南東隅の大型掘立柱建物の西側で伽藍内を東西で区画する南北の築地塀との中ほどの地点に設定した。

(1) 基本層序

地表は褐色土の耕作土が見られる。この表土を取り除くと明黄褐色の地山となり，この層の上面で遺構の検出を行った。

(2) 検出遺構 (Fig.12)

溝 SD04022

調査区を北北西から南南東で検出された溝で，幅 1 ～ 1.5 m，深さ 0.2 mを測る。一部は 28 次の No.1 トレンチで検出済み。

土坑 SK04023

SD04023 の南端上で検出された。1.3 m × 1 mの楕円形の土坑で，全体が瓦で覆われている。瓦を捨てた土坑か。

火葬墓 SX04024

南北 1.1 mの隅丸方形の土坑と思われる。焼土・炭・瓦片を含む。特に周縁部がよく焼けて赤くなっている。中世の火葬墓と考えられる。

竪穴住居 SI04026

南北 3.8 mを測る。埋土に炭をわずかに含む。特に東側の張り出した部分では炭と土師器片を多く含むことから，煙道ではないかと考えられる。

溝 SD04025

1989 年の堂跡６調査区で検出済み。幅約 0.2 m，深さ約 0.2 mを測り，調査区を縦断する南北の溝である。

その他の遺構

この調査区では大小 28 のピットを検出したが，建物として成立するものはなかった。

(3) 出土遺物

出土遺物は少なく，瓦が土嚢袋に３袋程度出土した。ほとんどが土坑 SK04023 の上面出土である。

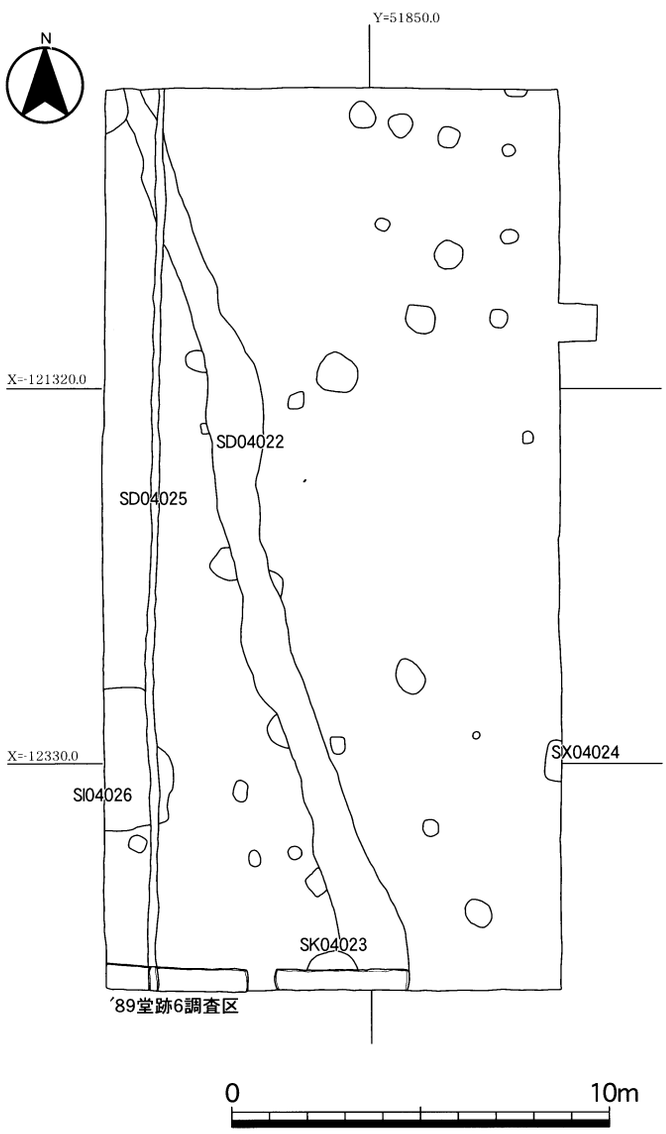


Fig.12　**塔推定地調査区遺構配置図　（1：200）**

3. 東門推定地調査区

昨年度の第 29 次調査では，食堂と思われる建物と南北の築地塀が一部で途切れた部分で西側の門が確認され，北東院の一部構成が明らかとなった。しかし，同調査では，北東院から築地塀で区画された内と外を結ぶ門の存在を確認するため，築地東辺上を調査したが，門の存在を確認することができなかった。そのため、今年度の調査において引き続き北東院の東門を確認するため，調査区を設定し調査を行った。また，食堂と思われる大型の掘立柱建物が北東院の中心からやや西よりに建っていることから，東辺の築地塀と大型の掘立柱建物の間の空間を併せて調査した。

(1) 基本層序

地表は褐色の耕作土がある。この表土を取り除くと明黄褐色・明赤褐色の地山となり，この層の上面で遺構の検出を行った。

(2) 検出遺構 (Fig.13)

築地東辺 SA04029

上部は全く削平されていて痕跡をとどめていないが，平行する両側の溝 SD04028・SD04036 によって基底が推定される。幅は約 2.5 mである。

築地東辺外溝 SD04028

築地東辺 SA04029 の外側溝のあたる南北方向の溝である。幅約 2.2 mで深さ 0.5 mを測る。断面は，溝の外側では落込み，築地側では緩やかに立ち上がる。上層では瓦片を多少含むが，中層および下層では含まない。

築地東辺内溝 SD04036

築地東辺 SA04029 の内側溝にあたる南北方向の溝である。検出面では幅約 4.5 mを測るが，後世の撹乱溝が大きく抉っている。断面による観察でも，遺構が重複し西肩は確認することができないため，内溝本来の幅は不明である。深さ 0.6 mの逆台形でほとんど瓦を含まない。

4. 築地北調査区

第 28 次調査で伽藍の東側 3 分の 1 を区画する南北の築地塀と南北を区画する東西の築地塀の存在が確認され，北東院の規模が明らかとなった。また，昨年度の第 29 次調査では，南北の築地塀の中ほどで門を確認した。

今年度の調査では，第 29 次調査で確認した門より北の南北の築地塀の確認のため，北辺築地と伽藍を区画する南北の築地の接点に調査区を設定した。

(1) 基本層序

地表は褐色の耕作土がある。この耕作土を取り除くと明褐色の地山となり，この層の上面で遺構の検出を行った。

(2) 検出遺構 (Fig.15)

南北築地 SA04052

第 29 次調査の SA0316 と同じ。東西方向の築地で上部は全く削平されていて痕跡をとどめていない。平行する両側の溝 SD04068・SD04066 によって基底が推定される。幅は約 2 mである。北辺の築地塀とは，内溝 SD04059 を挟んで T 字状になっていたようである。

築地北辺 SA04069

第 29 次調査の SA0351 と同じ。東西方向の築地で約 12 mを検出した。上部は全く削平されていて痕跡をとどめていない。基底部の幅を推定するため調査区を北に拡張して検出した。平行する両側の溝 SD04055・SD04059 によって基底が推定される。幅は約 2.7 mである。

溝 SD04068

南北築地 SA04052 の西側の側溝にあたる南北方向の溝である。溝 SD04061 が重複しており西肩が確認できないため，幅を確認することはできない。遺物はほとんど含まず，断面は逆台形である。深さは 0.5 m程度である。

溝 SD04066

南北築地 SA04052 の東側の側溝にあたる南北方向の溝である。幅は 1.1 mを測り，遺物はほとんど含まない。深さは 0.5 m程度である。

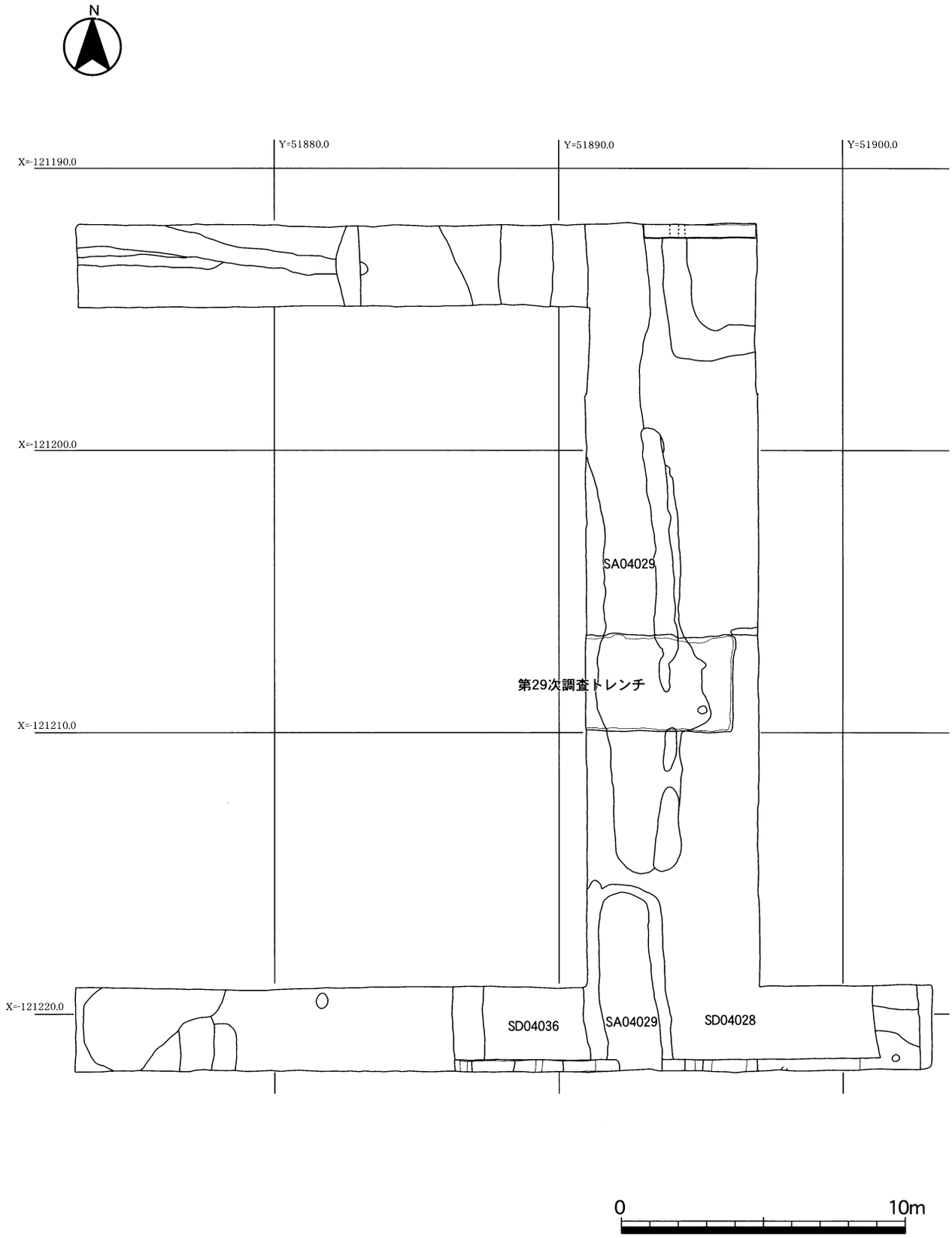
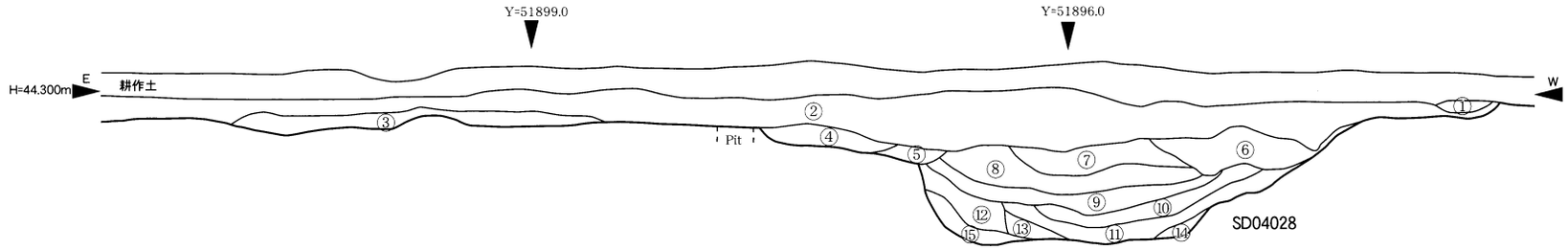


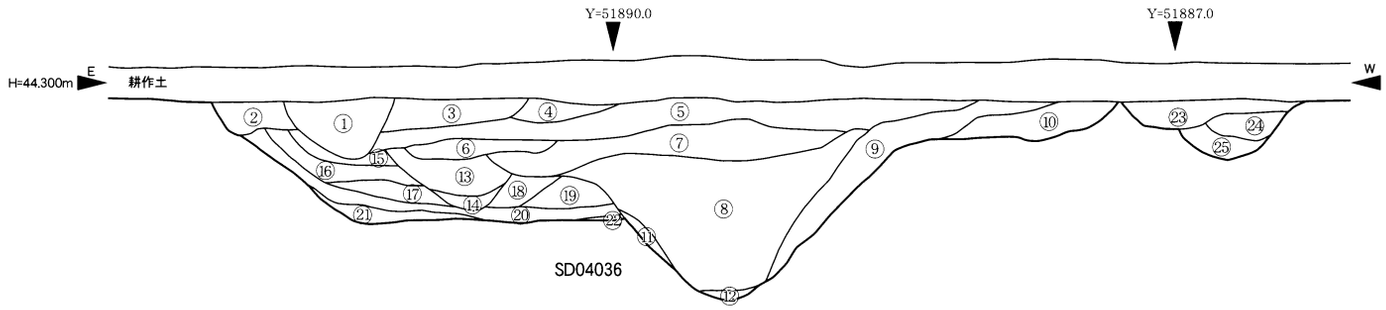
Fig.13　**東門推定地調査区遺構配置図　（1：200）**

X=-121222ラインサブトレンチ



① 10YR3/4　暗褐色土　全体が瓦片
② 7.5YR3/4　暗褐色土　まばらに瓦片と礫を含む
③ 7.5YR3/4　暗褐色土　全体に瓦片と少量の炭化物を含む
④ 7.5YR4/6　褐色土
⑤ 7.5YR5/8　明褐色土　やや黒がかる
⑥ 7.5YR4/6　褐色土　しまりなく瓦片を含む
⑦ 7.5YR4/4　褐色土　瓦片を少量含む
⑧ 7.5YR4/6　褐色土　7.5YR5/6明褐色土が混じる
⑨ 7.5YR4/6　褐色土
⑩ 7.5YR5/6　明褐色土
⑪ 7.5YR4/6　褐色土　やや黒がかる
⑫ 7.5YR5/6　明褐色土
⑬ 7.5YR4/6　褐色土
⑭ 7.5YR4/6　褐色土
⑮ 7.5YR4/6　褐色土　しまる
Pit 7.5YR4/4　褐色土
地山　5YR5/8　明赤褐色土

X=-121222ラインサブトレンチ



① 10YR3/4　暗褐色土　全体が瓦
② 7.5YR5/6　明褐色土
③ 7.5YR4/4　褐色土
④ 7.5YR3/4　暗褐色土
⑤ 7.5YR3/4　暗褐色土
⑥ 7.5YR4/4　褐色土
⑦ 7.5YR4/4　褐色土　やや赤がかり瓦片を少量含む
⑧ 7.5YR4/4　褐色土　しまりなく全体に瓦と礫を含む
⑨ 7.5YR4/4　褐色土　ややしまりがなく瓦片を含む
⑩ 7.5YR4/6　褐色土
⑪ 7.5YR5/8　明褐色土
⑫ 7.5YR6/5　明褐色土　瓦片を含む
⑬ 7.5YR4/6　褐色土　やや黒がかり瓦片を少量含む
⑭ 7.5YR4/6　褐色土　しまりがなく瓦片を少量含む
⑮ 7.5YR4/6　褐色土
⑯ 7.5YR5/4　明褐色土
⑰ 7.5YR4/6　褐色土　やや黒がかる
⑱ 7.5YR4/6　褐色土　やや黒がかる
⑲ 5YR5/8　明赤褐　しまる
⑳ 7.5YR4/6　褐色土　よくしまる
㉑ 5YR5/8　明赤褐
㉒ 7.5YR4/6　褐色土　赤がかりよくしまる
㉓ 7.5YR4/6　褐色土　黒がかり瓦片を少量含む
㉔ 7.5YR4/6　褐色土　瓦片を少量含む
㉕ 7.5YR5/6　明褐色土　瓦片を少量含む
地山　5YR5/8　明赤褐色土　底では7.5YR5/8明褐色土

Fig. 14　**東門推定地調査区セクション図（1：40）**

0　2m

溝 SD04059

築地北辺 SA04069 の内側溝にあたる東西方向の溝である。断面による観察では，南肩と北肩がともに溝で切られているため幅を確認することができない。そのため，土坑 SK04067 を 0.1 ～ 0.2 m下げ平面で検出し溝の幅を確認した。幅約 3 mで皿状の断面を呈し，検出面からの深さは 0.8 m程度である。遺物は，上層では瓦片が入り，下層では遺物を含まない。土坑 SK04067 下では大ぶりの瓦を確認した。

溝 SD04064・SD04065

築地 SA04069 の外側溝にあたる東西方向の溝である。検出面は，北に向かって 0.3 mほど下がる。

土坑 SK04067

調査区の東側で築地より南のほぼ全面で検出した。全体に瓦片を含み北西隅では大ぶりの瓦がまとまって出土した。深さは 0.2 ～ 0.3 m程度である。

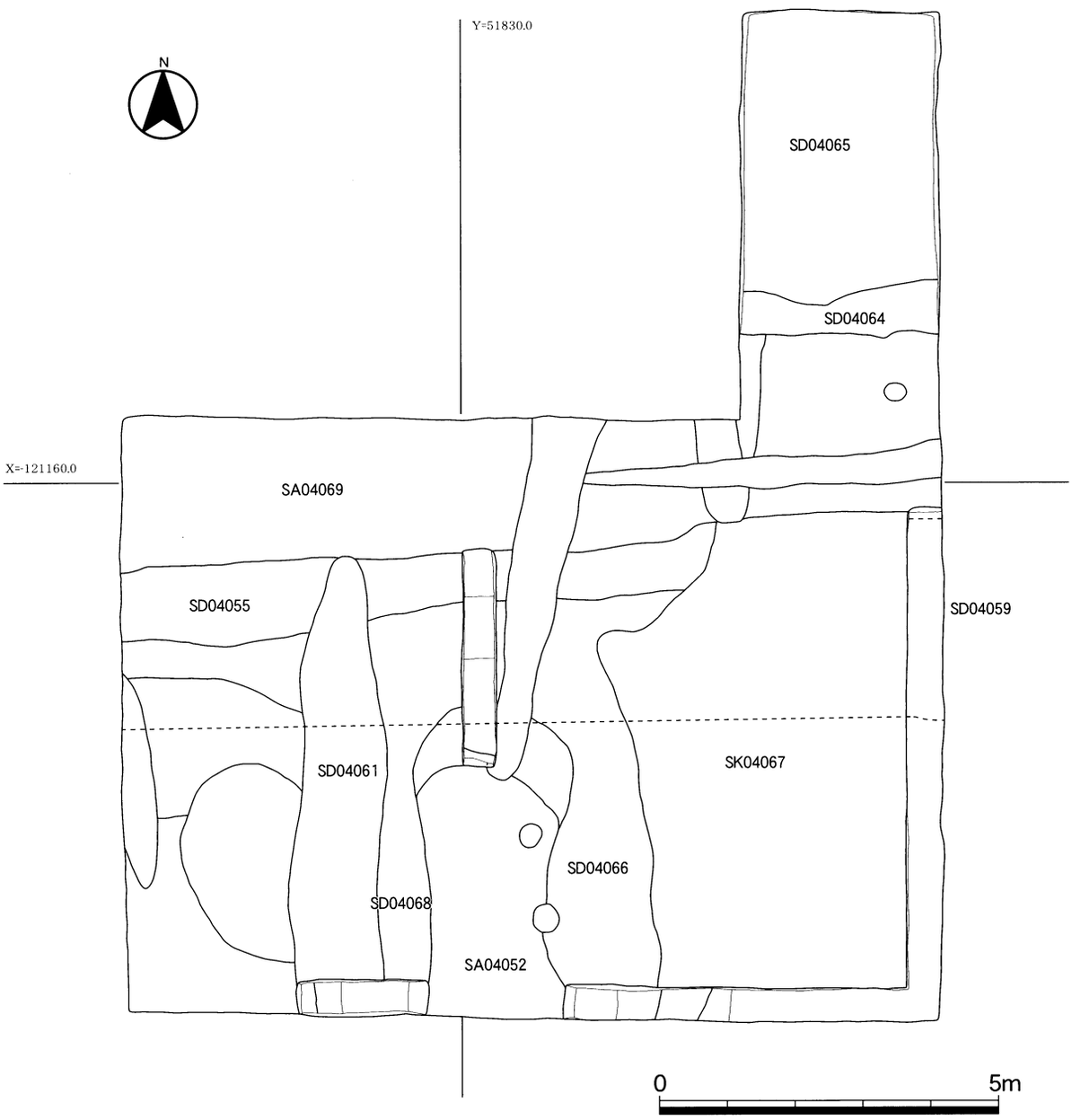
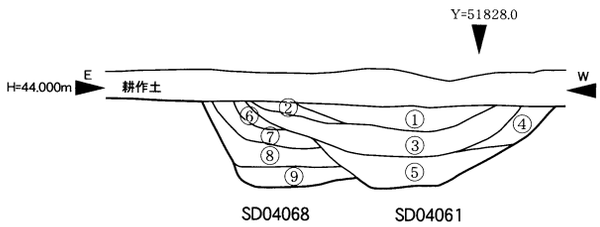


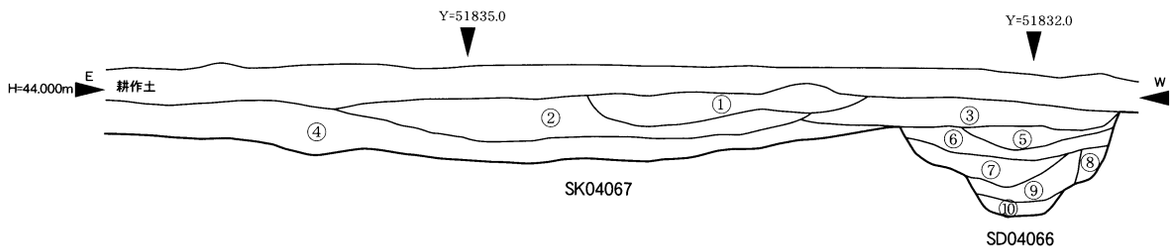
Fig.15　**東門推定地調査区遺構配置図　（1：200）**

X=-121168ラインサブトレンチ



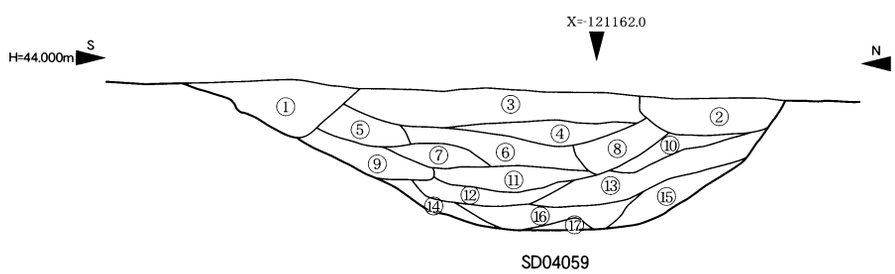
① 7.5YR4/4　褐色土
② 7.5YR5/8　明褐色土
③ 7.5YR4/4　褐色土　大ぶりな瓦を全体に含む
④ 7.5YR5/6　明褐色土
⑤ 7.5YR4/4　褐色土　7.5YR5/6明褐色土混　瓦片を少量含む
⑥ 7.5YR5/8　明褐色土
⑦ 7.5YR4/6　褐色土
⑧ 7.5YR5/8　明褐色土　上層で瓦片を含む　しまる
⑨ 7.5YR5/8　明褐色土　5YR4/8赤褐色土が混じる　しまる
地山　7.5YR5/8　明褐色土

X=-121168ラインサブトレンチ



① 10YR4/4　褐色土　全体に瓦片を含む　上層は大ぶりの瓦を含む
② 10YR4/6　褐色土　瓦片を含む
③ 7.5YR4/4　褐色土
④ 10YR4/6　褐色土　瓦片を少量含む
⑤ 7.5YR4/6　褐色土　やや赤がかる
⑥ 7.5YR4/6　褐色土
⑦ 7.5YR5/6　明褐色土
⑧ 7.5YR5/8　明褐色土と5YR4/8赤褐色土のまだら
⑨ 7.5YR5/8　明褐色土
⑩ 7.5YR4/6　褐色土　上層は7.5YR5/8明褐色土が混じる
地山　7.5YR5/8　明褐色土

Y=51830ラインサブトレンチ



① 7.5YR4/4　褐色土　7.5YR4/6褐色土混　炭化物を少量含む
② 10YR4/4　褐色土　炭化物を少量含む
③ 7.5YR5/8　明褐色土
④ 7.5YR5/6　明褐色土
⑤ 10YR4/6　褐色土　7.5YR4/6褐色土が混じる
⑥ 10YR5/6　黄褐色土　7.5YR5/6明褐色土が混じる
⑦ 10YR4/6　褐色土
⑧ 7.5YR4/6　褐色土　10YR5/8黄褐色土が混じる
⑨ 7.5YR4/4　褐色土　瓦片を含む
⑩ 7.5YR5/8　明褐色土
⑪ 7.5YR5/6　明褐色土　瓦片を含む
⑫ 10YR6/8　明黄褐色土
⑬ 7.5YR5/6　明褐色土　7.5YR4/6褐色土少量が混じる
⑭ 7.5YR5/8と7.5YR5/6のまだら　明褐色土
⑮ 7.5YR5/8　明褐色土
⑯ 7.5YR4/6　褐色土
⑰ 10YR6/4　褐色土
地山　7.5YR5/8　明褐色土　底は10YR5/8黄褐色土

Fig.16　**築地北調査セクション図（1：40）**

5. 僧坊調査区

第 29 次調査で講堂の北に軒廊で結ばれた僧坊と考えられる長屋状の建物が確認された。しかし，基壇は全く削平されており，東端の外周溝が比較的良好に残るのみであった。調査の結果から推定された僧坊の規模は南北 9 m×東西 72 mで，軒廊の規模は東西幅 6 mである。しかし，調査区の中ほどで外周溝が確認されなかったころから東西に 2 棟並ぶ可能性が残った。そのため，今年度の調査では，僧坊の南北と東西の規模を確認するため，昨年度の調査区に隣接した比較的残りがよいと思われる果樹園であった場所に調査区を設定した。

調査は，調査区内の柿を伐採し，表土除去の後に手作業による抜根作業をした。さらに，調査区の南には講堂の基壇跡の延長にある土手があり，これを手作業で崩した。また，軒廊の規模を確認するため，昨年度の調査区と接するところまでの東西 3 m，南北 6 mの調査区を拡張した。また，僧坊と築地北辺との間に南北約 20 m の空間があることから，関連施設が存在した可能性を探るために，サブトレンチを北に拡張した。一部の土坑や溝の断面を観察するためにサブトレンチを設定し掘削した。

(1) 基本層序

地表は褐色の耕作土に覆われる。この耕作土は薄く 0.2 m程度である。耕作土を取り除くと明褐色の地山となり，この層の上面で遺構の検出を行った。

(2) 検出遺構 (Fig.17)

僧坊 SB04070

第 29 次調査の SB0350 と同じ。基壇部分は全く削平されている。また，全体にわたって中世以降の溝や土坑によって撹乱されている。

軒廊 SC04087

第 29 次調査の SC0360 と同じ。僧坊基壇同様に全く削平されており地山が残るのみである。土坑 SK04075 から推定する東端と，第 29 次調査での推定幅の東端がほぼ一致する。

溝 SD04084

僧坊 SB04070 の北側外周溝である。上部に SK04083 が重複するため断面による検出のみである。深さは検出面から 0.4 m程度を測り，全体に大ぶりな瓦を含み，完形をとどめているものも見られた。

土坑 SK04086

調査区の中ほどから南側にかけて検出した土坑で，深さは約 0.6 mを測る。上層では瓦片を含むが，下層ではほとんど遺物を含まない。

落込み SD04096

南肩の確認にとどめ，断面による観察のみであるため遺構の規模や形は不明である。しかし，便宜上ここでは遺構を SD としたい。拡張したサブトレンチで検出。大ぶりの瓦が中・上層で出土し，下層では土師器，須恵器，製塩土器，緑釉陶器が出土した。

(3) 出土遺物（Fig.20）

出土遺物は土嚢袋で 100 袋以上が出土している。大半が講堂北の土手から出土した丸瓦・平瓦の破片である。この土手は，耕作をする際に瓦や石を廃棄してできたものと考えられ，全体が瓦で覆われていた。**軒丸瓦**

(15) は講堂北側の土手から出土した。単弁八葉蓮華文軒丸瓦でⅡＡ０２形式である。

丸瓦

(16) は SD04084 のサブトレンチから出土。玉縁式の丸瓦である。

刻印丸瓦

(17) は SD04084 のサブトレンチから出土。凸面に刻印される。刻印は「中」でＩＡ２６形式である。

塼

(18) は SK04086 のサブトレンチから出土。

須恵器

SD04096 から出土。(19) は坏の平頂蓋で，(20・21) は坏である。（20）の底部には糸切痕が残る。

灰釉陶器

(22) は皿で，SD04096 から出土。

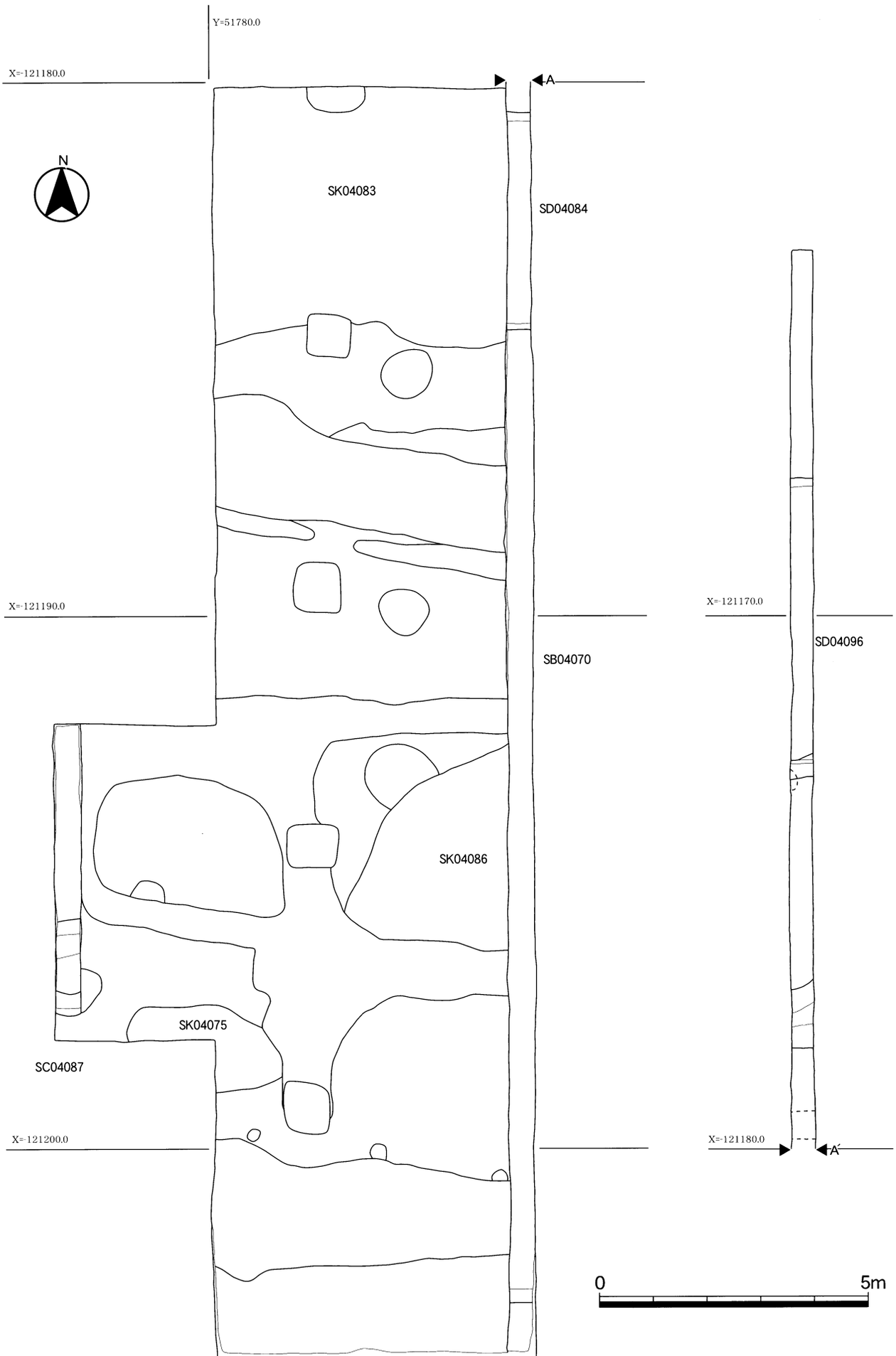


Fig.17　**僧坊調査区遺構配置図（1：100）**

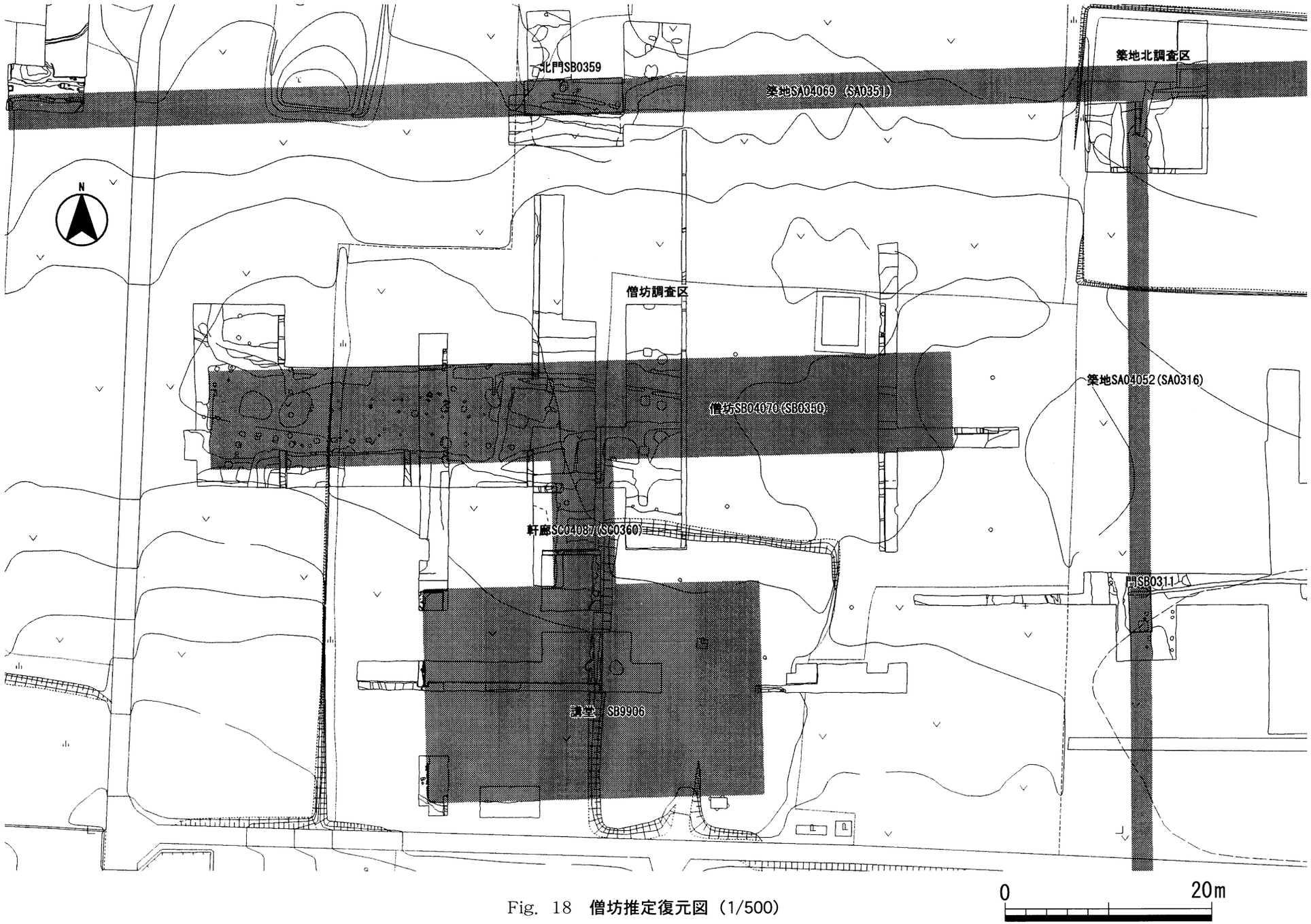
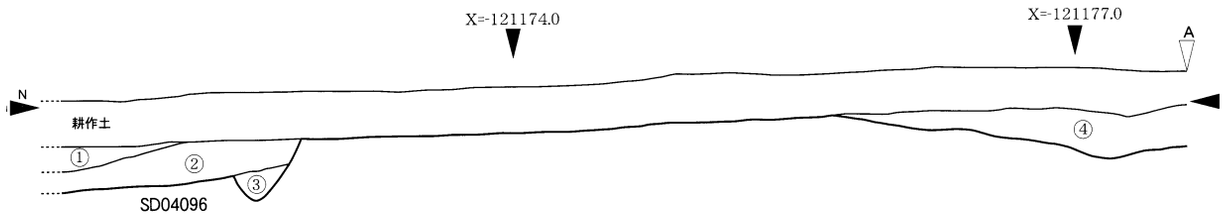
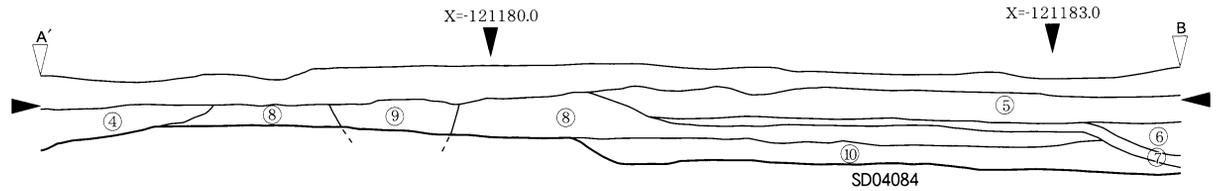
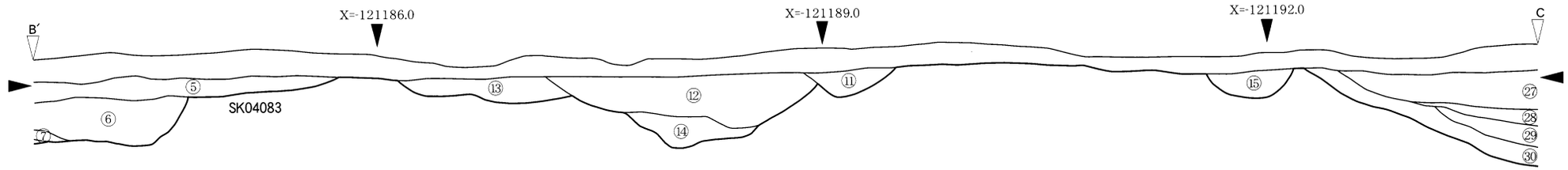


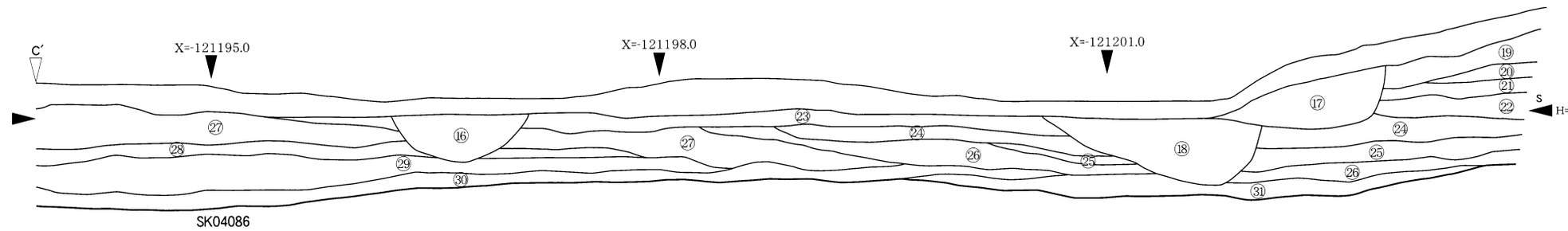
Fig. 18 僧坊推定復元図（1/500）

Y=51786ラインサブトレンチ









① 7.5YR3/4　暗褐色土　土師器片を含む
② 7.5YR4/6　褐色土　瓦片を含み下層で土師器片を多く含む
③ 7.5YR4/4　褐色土　7.5YR5/6明褐色土の固まりが入る
④ 7.5YR4/4　褐色土　7.5YR4/6が混じりややしまりがない　瓦片を少量含む
⑤ 7.5YR4/6　褐色土　瓦片をまばらに含む
⑥ 7.5YR4/6と7.5YR4/4のまだら　褐色土
⑦ 10YR4/4　褐色土　瓦片を少量含む
⑧ 7.5YR4/6　褐色土　やや赤がかる　瓦片を少量含む
⑨ 7.5YR4/4　褐色土　瓦片をまばらに含む
⑩ 7.5YR5/6　明褐色土　全体に大ぶりな瓦を含む
⑪ 7.5YR4/4　褐色土
⑫ 10YR4/6　褐色土　瓦片を少量含む
⑬ 7.5YR4/6　褐色土
⑭ 7.5YR4/4　褐色土　下層で7.5YR5/6明褐色土が少量混じる
⑮ 10YR4/4　褐色土　しまりがない
⑯ 10YR4/4　褐色土　しまりがない　瓦片を少量含む
⑰ 7.5YR3/4　暗褐色土　全体が瓦片でしまりがない
⑱ 7.5YR4/4　褐色土　瓦片を含む
⑲ 7.5YR4/6　褐色土　全体に瓦片を含む
⑳ 10YR4/6　褐色土　全体に瓦片を含む
㉑ 7.5YR5/8　明褐色土　全体に瓦片を含む
㉒ 7.5YR4/6　褐色土　全体に瓦片を含む
㉓ 10YR4/6　褐色土　瓦片をまばらに含む
㉔ 7.5YR4/6　褐色土　やや黒がかる
㉕ 10YR4/6　褐色土　全体に瓦片を含む
㉖ 7.5YR5/8　明褐色土　やや赤がかる　北側の下層で大ぶりな瓦を含む
㉗ 7.5YR4/6　褐色土　瓦片を少量含む
㉘ 7.5YR4/4　褐色土　7.5YR4/6褐色土が混じる
㉙ 7.5YR5/8　明褐色土
㉚ 7.5YR4/4　褐色土
㉛ 7.5YR4/6　褐色土　大ぶりな瓦を含む
地山　7.5YR5/8　明褐色土

Fig. 19　**僧坊調査区セクション図（1：40）**

0　2m

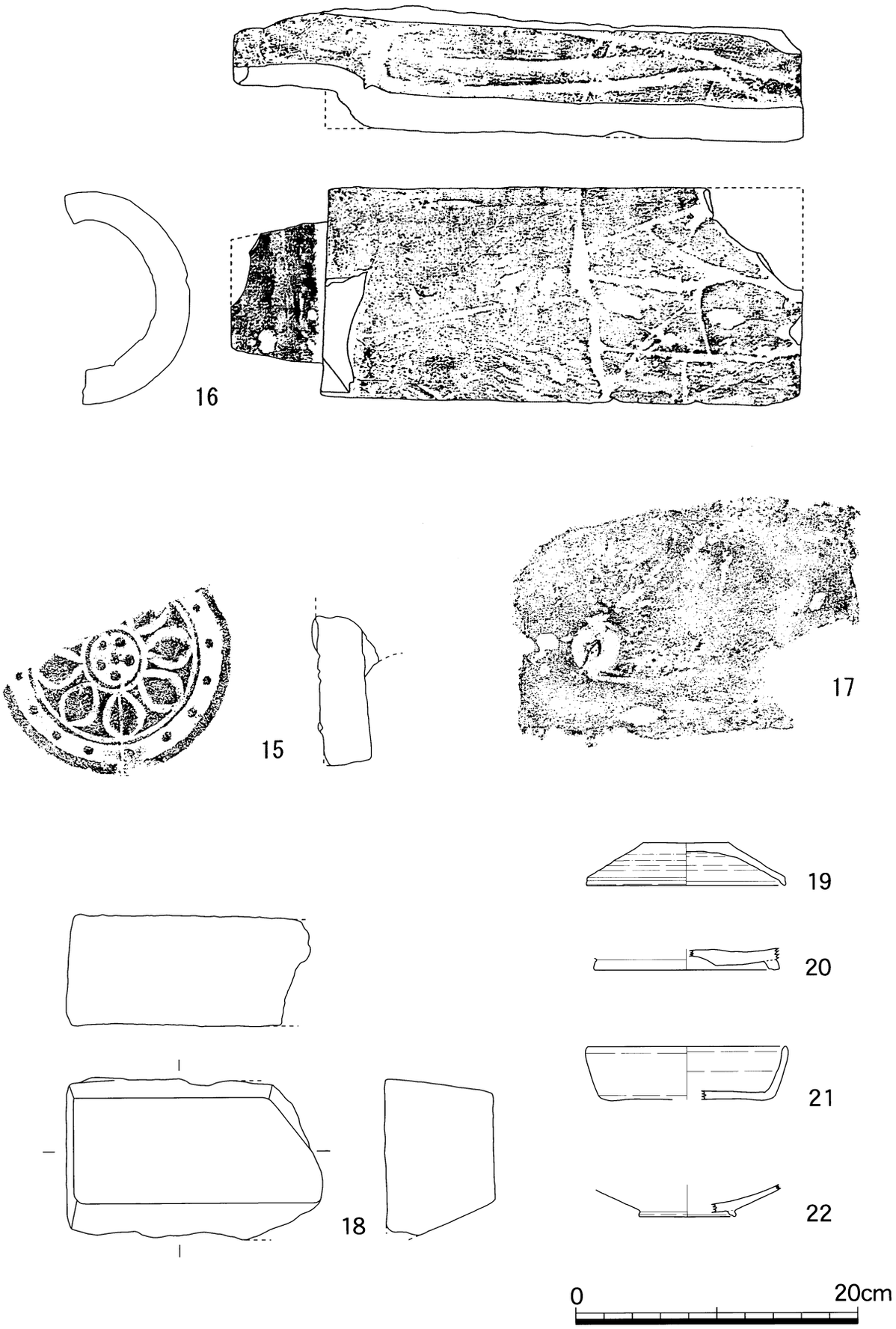


Fig.20　**僧坊出土瓦・塼・土器（1：4）**

Ⅲ．まとめ

南北築地 SA04052

2002 年度の第 28 次調査において伽藍地の東約 3 分の 1 を区画する南北の築地塀と，この区画をさらに南北に区画する東西の築地塀の存在が確認された。南北方向の築地と築地東辺の距離（芯々）は約 64 mを測る。また，東西方向の築地と築地北辺および築地南辺間の距離はそれぞれ約 90 mと 96 mを測る。

東西方向の築地より北の南北方向の築地は第 29 次調査でも確認されており，中ほどに門も確認された。今回も築地北調査区で南北築地を確認し，北端は築地北辺 SA04069 に対して内溝 SD04059 を挟んで T 字状であることを確認した。

東西方向の築地より南の南北方向の築地塀は，後世の撹乱が著しくその存在についてはこれまでの調査では確認されていない。しかし，第 28 次調査で東西と南北の築地塀の接点が側溝を挟んで⊢字状になり若干南につづくことから，築地塀が存在した可能性が高いと考えられてきた。しかし，すぐ南側では，過去の農地の区画が異なり一段低くなることから，南北方向の築地は確認されていなかった。今回の調査においても築地南調査区で南北方向の築地塀と築地南辺 SA04004 との接点にあたる地点に調査区を設定し検出を試みたが，南北方向の築地塀確認には至らなかった。

今回の調査結果から築地北・南両調査区の検出面と溝底のレベルを比較し，遺構の残存状況の検証をしたい。築地南調査区では，検出面から築地南辺内溝 SD04001 底は約 0.3 mを測る。築地北調査区では，検出面から築地北辺内溝 SD04059 底は約 0.8 mを，南北築地 SA04052 の側溝底は最大で約 0.5 mをそれぞれ測り，側溝が約 0.3 m浅いこととなる。これを築地南調査区に当てはめると，その差が 0 となる。一概に溝が南北で同規模であったとは言えないが，概ね規模が同じであったと考えると，南北築地の側溝は削平されてしまった可能性が極めて高くなる。

南東院南門

南東院南門推定地調査区では，結果として門が存在した可能性を示す結果となった。調査では，築地南辺の内溝 SD04001 から派生して北に延び，芯々で約 3 mの距離で平行する形で溝 SD04013 が検出された。この溝上に覆い被さるような状態で溝 SD04010 が確認され，ここからは大ぶりの瓦や多数の軒瓦がほぼ完全な状態で出土した。伊勢国分寺でこれまでに確認された門では，築地塀に伴う溝が門を避けるように蛇行して検出されている例が多いことから，溝 SD04013 は，門の外周溝とも考えることができる。

しかし，今回の調査では，これ以上調査区を拡張し調査することができなかったため，門が存在したかどうかは不確定であり，存在したとしてもその規模も不明である。今後，南東院南門推定地調査区の西側や南に通る農道の地下に存在する可能性が高い築地南辺の南肩とその外溝を確認する等，周辺をさらに調査し南東院の南門の存在について検証する必要性がある。

僧坊 SB04070

僧坊は昨年度の第 29 次調査において確認され，その規模は，南北 9 m（30 尺）×東西 72 m（240 尺）と推定された。同調査では，東端で南北と東の外周溝を確認したのみであるため東西方向の規模は，伽藍の中心軸で折り返して推定している。西端と考えられる地点も調査したが僧坊の規模を示すような明確な遺構は確認されていない。東西の規模はこれ以上確認する手段がないため，今回の調査は，1 棟の東西方向に長い僧坊であったのかを確認するとともに，南北の規模において再度確認するための調査を行った。しかし，昨年度と同様に後世の撹乱が著しく，僧坊に関連する遺構は北の外周溝 SD04084 のみの確認であった。溝 SD04084 の位置が，昨年度確認した北の外周溝の位置とほぼ一致し，調査区の東西両端で確認したことから，これを外周溝とした。このため，僧坊が 2 棟東西に並んでいた可能性も低くなり，僧坊の

規模としては，昨年度発表した，南北９ｍ×東西 72 ｍではないかと思われる。

調査終了前に，僧坊の北に国分寺の関連施設が存在しないか，サブトレンチを北に延長して追加調査した。その結果，溝 SD04084 の北肩から北に約 7.5 ｍの地点からの落込み SD04096 を確認した。この SD04096 の上面からは大ぶりの瓦が全面で出土し，下層からは，土師器・須恵器・製塩土器・緑釉陶器といった生活雑器が多数出土した。しかし，幅約 0.5 ｍのサブトレンチによる調査である性質上，落込みの正確な形状が把握できないどころか，破壊してしまう恐れがあった。追加調査の時期が２月で，期間的に厳しく面による調査も行うことができないため，掘削を途中で止め来年度以降の調査課題とすることとした。

今回の調査では，これほどまとまって国分寺と同時代の土器が出土したことはなく，廃棄土坑の可能性も否定できない。しかし，この落込みが溝で，僧坊の外周溝と同様の体であれば，僧坊と築地北辺との間に小子坊のような関連施設が存在した可能性も考えられる。

また，第 29 次調査で確認された食堂以外の主要伽藍地内で製塩土器が確認されたことも興味深い結果であり，今後の更なる調査を待ちたい。

最後に

今回の第 30 次調査においては，僧坊の規模の再確認をしたほか，伽藍地の東３分の１を区画する南北方向の築地と北辺の築地の接点の確認，同じく東３分の１の築地南辺上で南東院の南門が存在したと思われる遺構が検出された。さらに，僧坊の北では，新たな関連施設が存在した可能性が出てきた。

しかし，残念ながら当初の大きな目的であった塔については，何ら手がかりを得ることができない結果となった。塔の確認については，伽藍地内の施設の配置が明らかになるにつれて，塔を建設することのできるスペースや未調査地が限られてしまい，年々確認する条件が厳しくなっているのが現状である。

次年度以降の調査については，塔が存在したという可能性を信じ，その確認とともに，存在の可能性がある新たな施設の確認に期待したい。

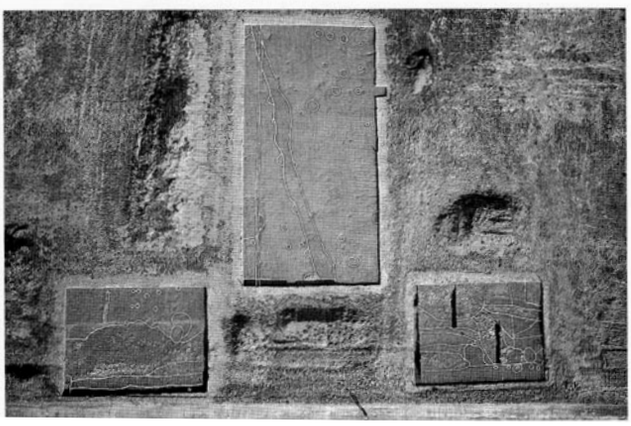
〈参考文献〉

新田剛 2002「伊勢国分寺跡 1」鈴鹿市教育委員会

藤原秀樹他 2002「伊勢国分寺跡２」鈴鹿市教育委員会

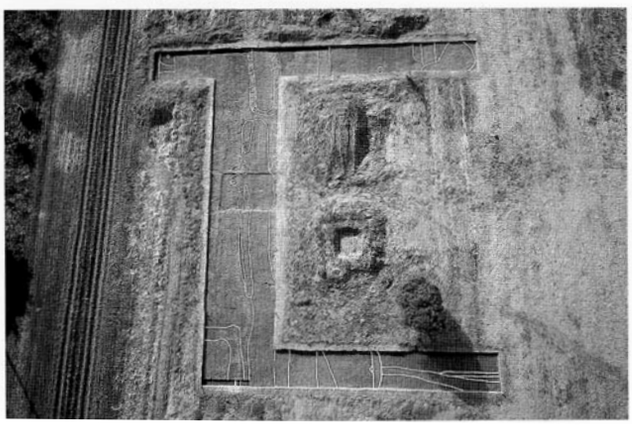
藤原秀樹他 2003「伊勢国分寺跡３」鈴鹿市教育委員会

藤原秀樹 2003「伊勢国分寺跡４」鈴鹿市教育委員会

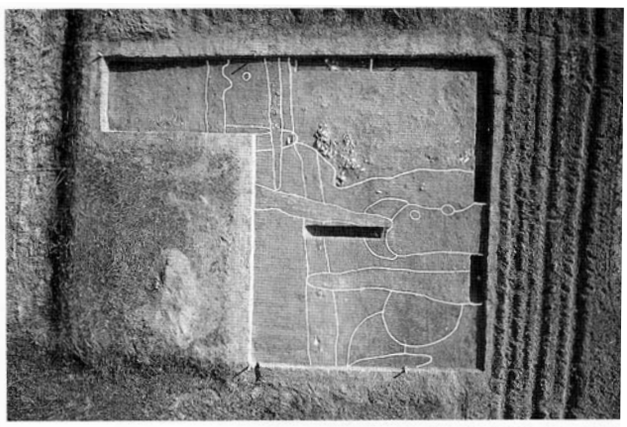


築地南調査区・南東院南門推定地調査区・塔推定地調査区全景

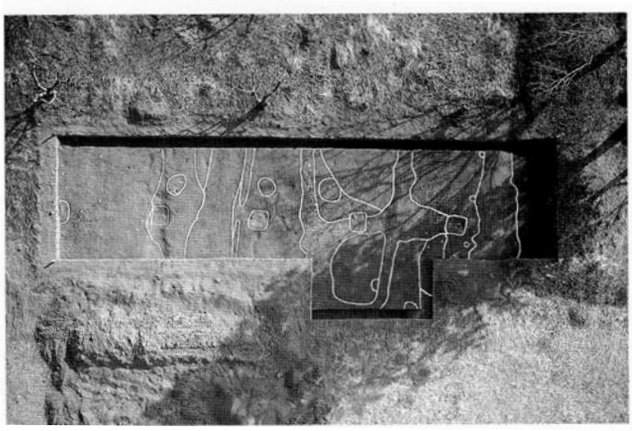
南門推定地調査区全景



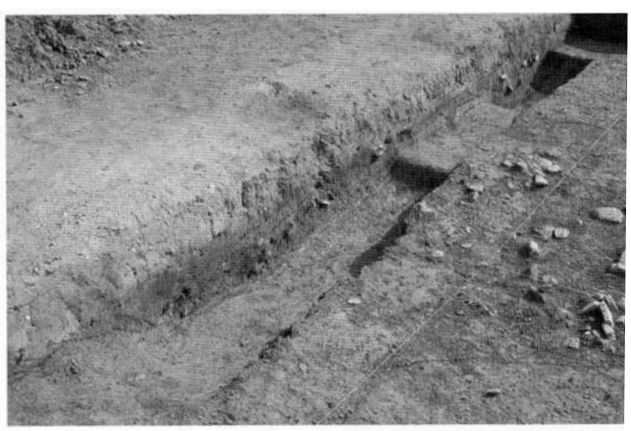
東門推定地調査区全景



築地北調査区全景



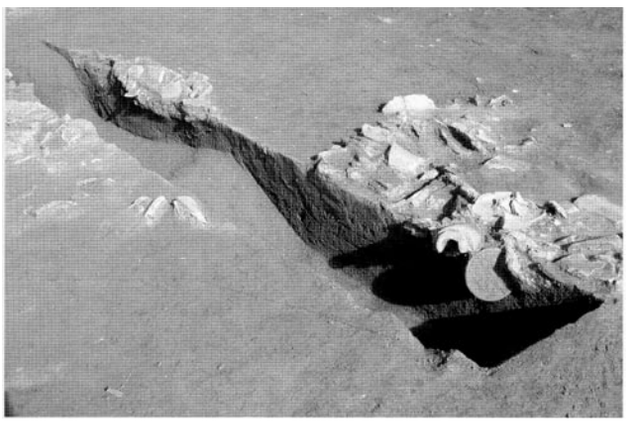
僧坊調査区全景



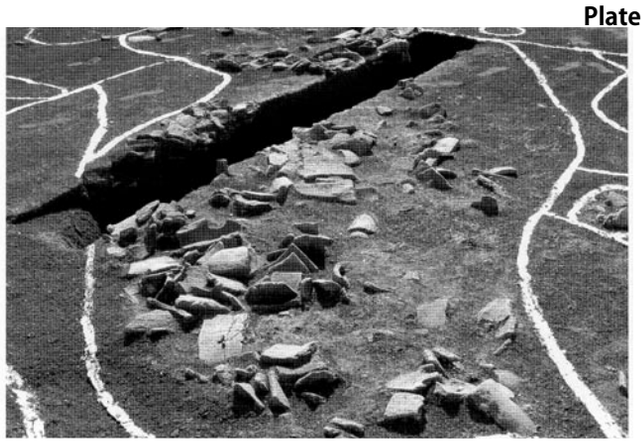
築地南 SD04001・SD04003 サブトレンチ（西から）

東門推定地 SD04001・SK04015 サブトレンチ (東から)

南門推定地 SD04013・SD04015 サブトレンチ（西から）

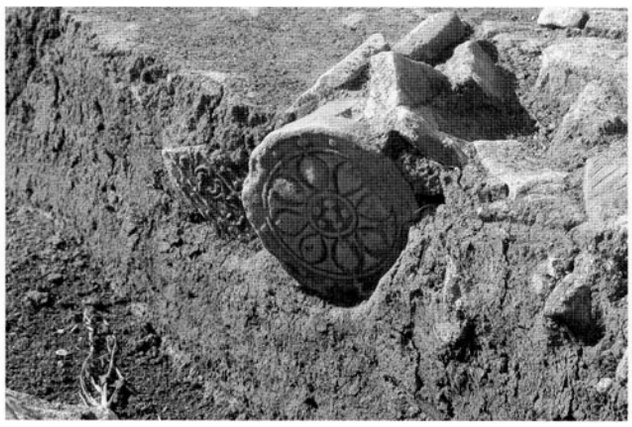


南門推定地 SD04010・SD04013 サブトレンチ (西から)



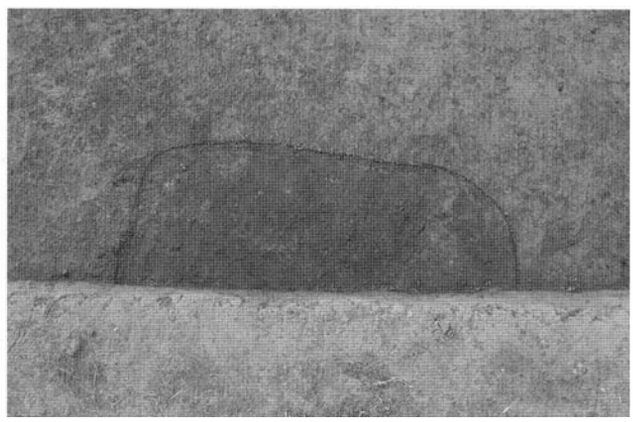
南門推定地 SD04010 瓦堆積状況 (北から)

南門推定地 SD04010 軒丸瓦 1 出土状況 (西から)

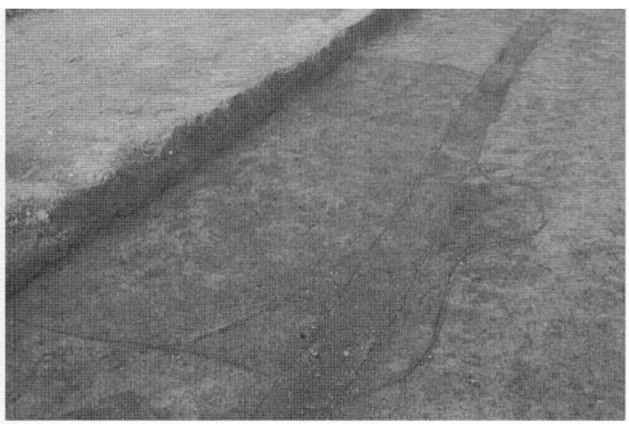


南門推定地 SD04010 軒丸瓦 2・軒平瓦 10 出土状況 (東から)

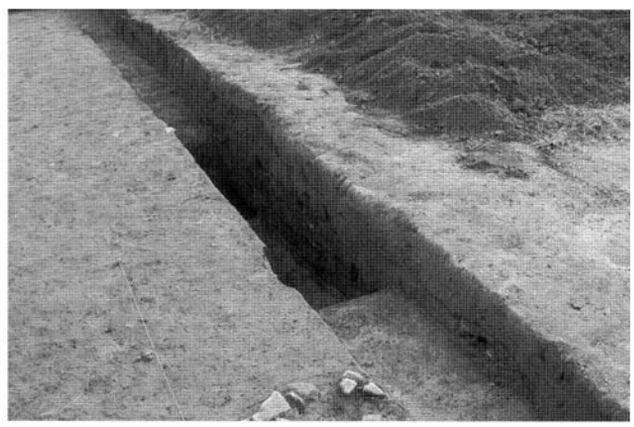
塔推定地 SK04023(南から)



塔推定地 SX04024(東から)

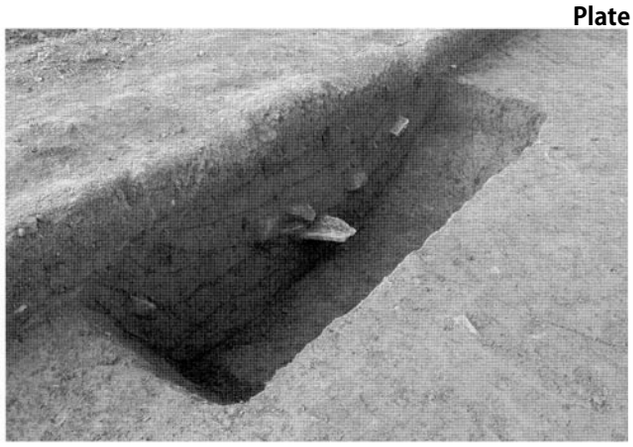


塔推定地 SI04026(東から)

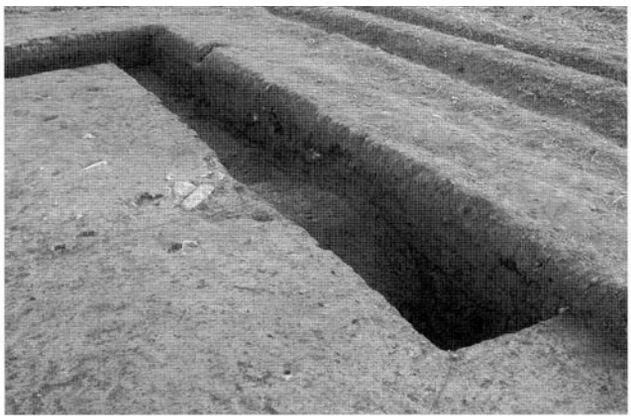


東門推定地 SD04028 サブトレンチ (東から)

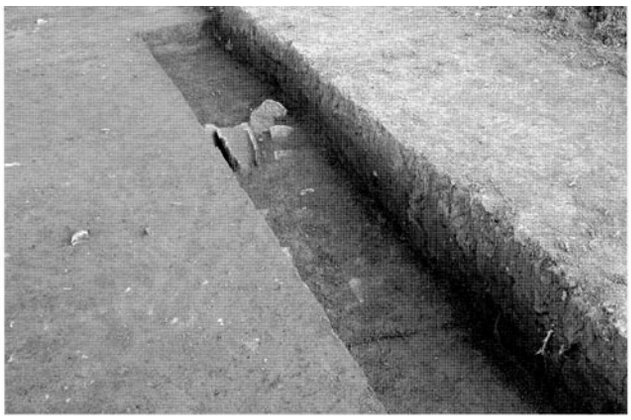
東門推定地 SD04036 サブトレンチ (東から)



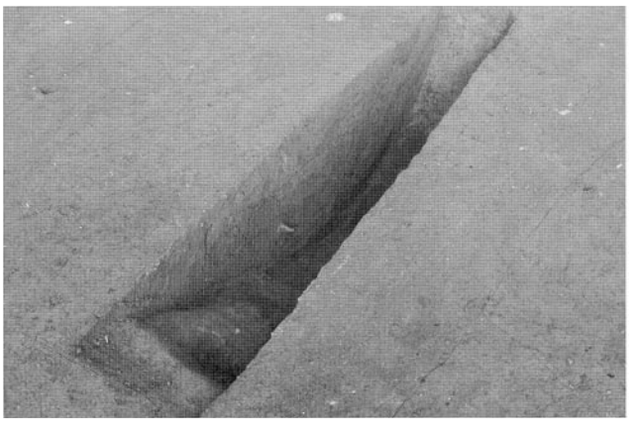
築地北 SD04061・SD04068 サブトレンチ (東から)



築地北 SD04066 サブトレンチ (西から)

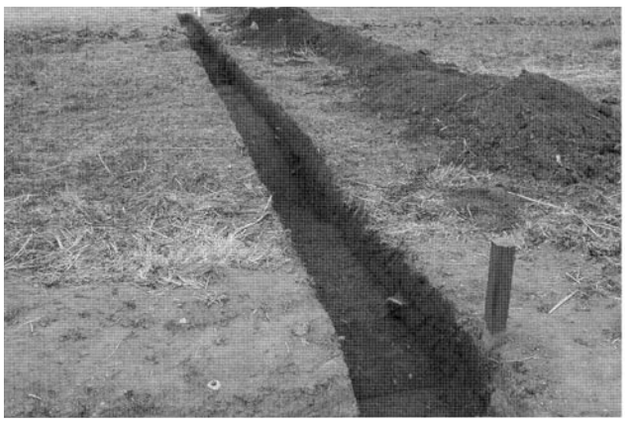


築地北 SD04059(南から)



築地北 SD04059 サブトレンチ (東から)

僧坊 SD04084 サブトレンチ (西から)



僧坊サブトレンチ拡張 (西から)

僧坊　講堂北土手サブトレンチ (西から)

Plate 4

1

2

3

4

5

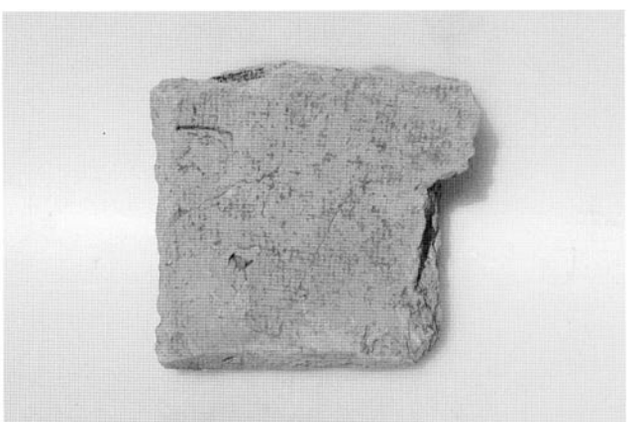
6

7

8

9

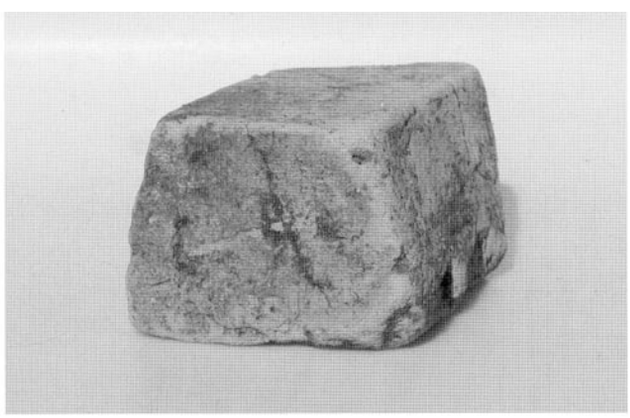
10



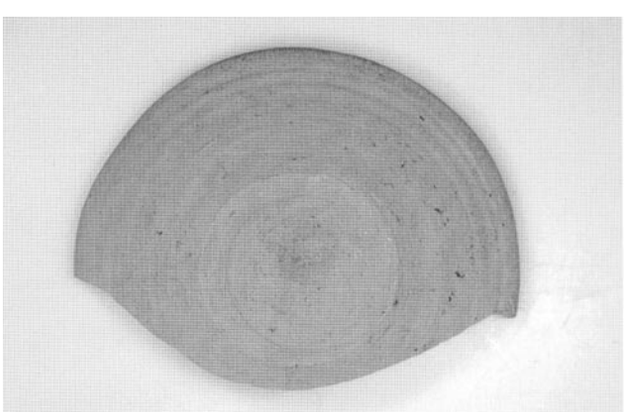
14

15

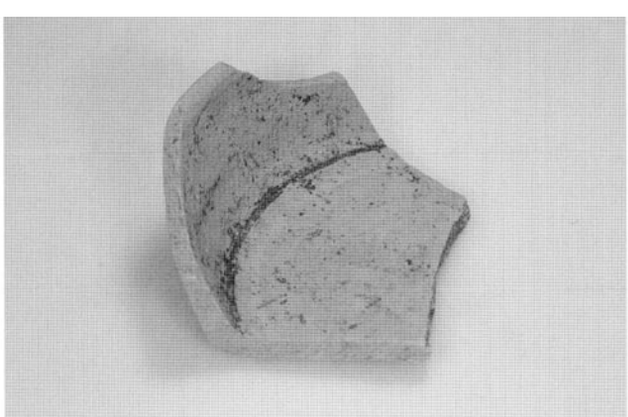
17



18



19



21

報　告　書　抄　録

ふりがな	いせこくぶんじあとご
書　　名	伊勢國分寺跡５
編著者名	伊藤（いとう）　淳（あつし）
編集機関	鈴鹿市考古博物館
所　在　地	〒513-0013　三重県鈴鹿市国分町（すずかしこくぶちょう）224 番地　TEL0593(74)1994
発行年月日	西暦 2005 年 3 月 31 日

所収遺跡名	所　在　地	コード		北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
		市　町　村	遺跡番号					
伊勢国分寺跡（いせこくぶんじあと）	三重県鈴鹿市（みえけんすずかし）国分町字堂跡（こくぶちょうあざどうあと）292 ほか	24207	３６１	34°54′32″	136°33′50″	2004.7.23 ～ 2005.3.25	1,100 ㎡	学術調査 史跡整備

種　別	おもな時代	おもな遺構	おもな遺物	特　記　事　項
寺院	奈良・平安	僧坊，築地 竪穴住居，溝，土坑	軒丸瓦，軒平瓦 平瓦，塼，須恵器 土師器，灰釉陶器	僧坊の規模を確認。伽藍地の東 1/3 を区画する築地塀と北辺の築地塀の接点を確認。

北緯・東経は講堂跡前の基準点 No.2 の位置 (世界測地系)

伊勢国分寺跡 5

発　行　日　2005 年 3 月 31 日
編集・発行　鈴鹿市考古博物館
〒 513-0013
三重県鈴鹿市国分町 224 番地
TEL0593(74)1994
FAX0593(74)0986
E-mail:kokohakubutsukan@city.suzuka.mie.jp
URL:http://www.edu.city.suzuka.mie.jp/museum/
印　　刷　（有) 三鈴印刷

Ise kokubun-ji Temple Site

Pteliminary Report No.5

March, 2005

Suzuka Municipal Museum of Archaeology